

## 第2章 東京訓練

### 《はじめての東京へ》

現地訓練を終え、東京に帰ってきたのは1月28日だった。彼女たちは、あと2週間ほど、現地で、日本語の基礎訓練が残っている。

帰ってきた翌日には、さっそく出社し現地訓練の報告をしなければならぬ。ドイツで訓練をしていた教官連中も帰ってきていた。ロンドン基地1、2期、フランクフルト基地1、2期、そして、ロンドン基地3、4期担任の私たちと、教官6人全員が揃った。東京では、すでにシガホール基地1期の訓練が始まっている。同時に、20年の歴史がある香港基地19期の訓練も始まっていた。

訓練部では、現地訓練の話題で花が咲いていた。どうもフランクフルト基地担当の教官の顔が冴えない。予想していたのとはだいぶ感じが違うようだ。

### 《寄宿舎の準備》

寄宿舎には、国内線CAたちのスカイハウス寮(当時)を使うことになった。京浜急行の北品川駅から歩いて10分弱のところにある。部屋は8畳程の広さに2つのベッドと洋服入れが備え付けられている。各階には、10人が一緒に洗面をできる洗面所とトイレがある。風呂場は、1階ロビー奥にあり、共同浴場スタイルになっている。食堂は2階で、50人程が一度に食事できる広さがある。食堂のとなりにラウンジがあり、食後の団欒をとれる。洗濯は、最上階にあるランドリールームでできる。

### 《寮生活》

何といっても、風呂のことが心配だった。共同浴場スタイルの風呂に、ヨーロッパ人がどう反応するか予想できないところがあった。だからといって、ホテルのように、各部屋に浴室をつくる訳にはいかない。共同浴場スタイルが、どうしても嫌だという人のために、シャワールームを用意した。

食事も、検討課題の一つだった。寮の食事といえば、大体、ひじきや肉じゃがなど、寮生がおふくろの味を楽しめるようなメニューが多い。焼き魚のような典型的な日本の食事もある。寮の食事は専門の会社に委託している。料理長に、ヨーロッパ人向けの献立を加えてくれるようお願いすることにした。

### 《泣きむしメリー》

1、2期の日本での訓練が始まった。このクラスの担任たちは忙しいので、代わりに、彼女たちの寮生活がうまくいっているか、様子をうかがいに、課長と2人で寮に行ってみることにした。寮監さんはじめ、寮関係者は英語が得意でないので、1、2期が到着した夜、担任が寮施設について、ある程度説明しておいた。

ところが、説明は聞いたものの、一晩過ぎてゆっくり見回してみると、自分達の生活の仕方とあまりにも違う。洗濯機ひとつとっても、使い方が判らない。寮の人に聞いても言葉がよく通じない。親元だけではなく、国を離れて東洋にやってきたが、生活文化の違いに戸惑い、2日目にしてもうホームシックになっている娘がいる。母親の声が聞きたくなかったのか、ホーイフレンドの音が聞きたくなかったのか判らないが、ロビーにある公衆電話の前で泣いている訓練生がいた。当時はインターネットなどない時代である。国際電話をかけるしかなかった。泣いているのは、大人っぽい感じのメリーだった。私たちを見ると、恥ずかしそうに逃げていった。一緒にいたキャロルに聞いたら、

「もうホームシックにかかっちゃったの！」

と教えてくれた。何人かが、すでにホームシックにかかっているらしい。

このような時、日本の女性なら、2ヶ月くらいの訓練のために、海外に住むことになっても、それほどホームシックにはならないと思う。そう想像していたので、ホームシックになっている訓練生をみて、こちらの方が戸惑ってしまった。そして、

「イギリス人ってけっこう泣くんだ！」

などと思ったりした。

### 《涙腺が違う》

日本人と欧米人の泣くときの姿を見ていると違いに気づく。日本人は涙が出てくると目頭を押さえる。欧米人はハンカチを鼻にあてるしぐさをする。ものの本によると、日本人と欧米人とは、鼻涙管の発達が違うようだ。涙が鼻に抜ける通路(鼻涙管)が、欧米人の方がよく発達しているため、涙が鼻に抜けやすいとのことである。そのため、涙が鼻水となって流れてくる。

## 《サバイバル日本語》

シンガポールや香港やフィリピンでは、町のどこへ行っても英語が通じる。シンガポールや香港は、もともとイギリスの影響を受けた国であり、考え方も欧米人の発想に近いものがある。また、フィリピンはスペインの植民地であったが、戦後は、アメリカの影響もあり、国民の多くは英語を話す。東南アジアでは、韓国と台湾とタイ、マレーシア、インドネシア、そして日本は、外国人にとって、街中で、英語が通じることが少なく、不便な国と言える。

訓練部の中にいるかぎり、教官が英語ですべてを説明してくれるので、何も不自由なことはない。ところが、町中で買物をしたり、食事をしたり、電車に乗ったりする時は、日本語でないと通じないことが多い。訓練生には、ロンドンで基礎日本語の授業をしてある。生の日本語に接して、身体で覚えるのもよい勉強の機会となる。日本で生活するのに最低限必要な日本語は覚えさせた。あとは自分たちで体験することが大切だ。実際、町で買物をしても、自分たちの日本語がけっこう通じるので喜んでた。

## 《通勤を教える》

当時、寄宿舎である寮から訓練部までの通勤に、京浜急行電鉄を利用させていた。今と違って、品川駅から羽田空港駅行きの直通電車はなかった。北品川駅から蒲田駅までいき、そこで同じ京浜急行の空港線に乗換えて、京浜急行羽田駅まで来る。そして、羽田駅からはバスを利用する。羽田東急ホテル前でバスを降りて、訓練センターまで歩く。寮から訓練センターまで約1時間の通勤となる。

ところが、この京浜急行という私鉄は、通勤者や利用者にとって、実に便利なダイヤを組んでいる。各駅停車から始まって急行、特急、そして快速特急まである。北品川駅は、品川駅の次の駅なので、各駅停車しか停まらない。北品川駅から蒲田駅まで行くには、各駅停車だと時間がかかるので、途中の青物横町で各駅停車から急行に乗換える。

英語で「各駅停車は」など考えながら途中の説明をしていく。Local Line (各駅停車)、Express(急行)、Limited Express(特急)があるので、乗り間違えないよう注意するのだが、肝心の電車には行き先の英語表記がない。次々に通過していく電車の色や形で説明する。「快速特急」などという英語は聞いたことがなかったので、即席英語で

Super limited Commuting Express と説明したら何とか理解したようだ。

蒲田駅での乗換えが分かれば、彼女たちだけで通勤できる。入社時の通勤方法は分かったようなので、今度は羽田から北品川への帰り方を説明しながら一緒に付いていく。定期券(Season Ticket または Commuter Pass)の使い方も分かったようだ。蒲田駅まで来たところで説明につまってしまった。次から次へと上りの電車が入ってくる。日本人であれば、たとえ乗ったことがない電車でも何とか分かる。案内版には、急行はどこそこの駅に停まると書いてある。

外国人は、各駅停車だの準急だのいろいろな電車が入ってくるのももうお手上げになる。北品川には各駅停車しか停まらないので、出勤時はそれに乗って、青物横町で隣ホームに入ってくる電車に乗り継げば、蒲田まで間違えず早く行ける。

欧米を旅行して、1人で電車に乗れるようになったら、旅行者として一人前と言える。筆者自身もイギリスやドイツで列車や電車に乗ることがあるが、この電車は本当に目的地に着くのかいつも不安になる。もし蒲田駅で急行に乗ってしまったら、青物横町駅で、特急や急行の通過待ちをしている隣ホームの各駅停車に乗ればよい。そうは言っても、電車のシステムが分からないと、何となく不安になる。簡単なのは各駅停車を利用し北品川まで行けばよいのだ。今度はどれが各駅停車なのか分からない。

乗り過ごしをしたり、急行だと思って乗ったら鈍行で時間がかかってしまったり、何度か失敗しながらも通勤できるようになった。そのうち、北品川駅や品川駅の街が分かるようになると、北品川で降りずに品川まで出てショッピングや食事をしていた。

川崎に滞在していた男性CA訓練生も京浜急行で通勤している。川崎駅から上り電車で、蒲田駅まで来て、空港線に乗換える。北品川駅に滞在している女性陣たちとは、反対方向から蒲田駅に向かう。川崎駅には、すべての電車が停車する。ある朝、男性CA訓練生たちが、なかなか出社して来ない。担任が心配して、宿泊先に連絡をとったが、すでに会社に向かったとの返事が返ってきた。心配しながらも授業を始めることにした。そうこうする内に出社してきた。どうしたのか聞いてみると、間違えて川崎で快速特急に乗ってしまったらしい。川崎駅を出た電車は品川まで停

まらない。蒲田駅を、あれよ、あれよと通過して行ってしまったそうだ。

### 《授業時間》

ロンドンでは、朝 9 時始まりだったが、東京では 8 時 30 分始まりになっている。1 時限を 50 分と設定し、10 分の休憩をはさみ、午前中に 4 時限、午後 4 時限の 1 日 8 時限授業なのだ。朝 8 時 30 分から 12 時 30 分までに午前中の授業を終わらせ、昼休みをはさんで、1 時 30 分から 5 時 30 分まで行う。ただし、これでは勤務時間短縮が叫ばれている時代に反するので、月水金は 7 時限授業の日として 4 時 30 分に終わる。

初日の朝、担任に連れられたロンドン基地 CA 訓練生全員が出社してきた。8 時 45 分から 1 期 2 期の開講式を始めの予定になっている。大きめの教室に、訓練生全員と教官ならびに部長や課長が出席し、式次第にそってとり行われる。司会は 1 期担任が行うことになっていた。我 3 期は、まだロンドンで日本語授業を受けている。

### 《足ヲ組ンデイモ真面目ニ聴イマス》

当時の訓練では、習慣の違いや文化の違いによる、価値観の相違がところどころに出てきた。そのたびに訓練生から質問を受ける。聞かれれば説明しなければならない。自分達の文化を異文化の人達に説明することに、日本人は慣れていない。

授業中の足組みも、その一つである。邦人 CA 訓練生が、足を組んで授業を聞いていると、教官は注意してきた。日本人として、礼儀に反しているというのが今までの規範だった。しかし、なぜ足を組んではいけないのか、どの教官も教えてきてはいない。訓練生も足を組んではダメである、とだけ言われた。邦人 CA たちは、そういうものなのかとそれに従ってきた。

欧米では、授業中に足を組むのは、日常的であり、ごく自然のしぐさになっている。自分たちにとっては、いつもの習慣であり、それを注意されれば、「なぜなのか」と聞いてくる。日本人の場合は、疑問に思っても、年上の人が出たことに対して、いちいち「なぜなのか」とは聞かない。教官たちも、いままで説明する必要もなかったもので、どうしてなのかと言われても、説明に窮してしまう。このようなことが「足組み」以外にも、たびたび出てきた。訓練生は、教官

はなんでも知っている、と思って純粋な気持ちで聞いてくる。

日本では、目上の者や先生が話している時に、足を組むのは失礼であると考えられている。会社の中でもそうである。例えば応接室で、ソファに座って打合せをする時、目下の者はソファに浅目に座り、足は組まないようにする。足を組む動作は、ホテルインゲージ上では、リラックスしているという意味を持っているからである。目上の人の前で、あまりリラックスした姿勢をとらないのが普通だ。

授業の話しで言えば、生徒はリラックス(=だらけている)せずに、神経を集中して講義を聴くことを要求される。それが日本の学校での授業態度となっている。

先生も生徒も、人間として平等である、と考えている欧米では、先生の前で足を組むことは失礼にならない。それより、授業中は、リラックスして聴いていた方が眠くならず、よく頭に入るといのが彼女たちの主張なのだ。授業に参加しているかどうかの問題なのだ。欧米の授業風景をテレビや映画で観ることがある。生徒は椅子の背に体をもたれかけ足を組んで聴いている。教師の方も、あまり気にかけていないようすで授業を行っている。先生は先生で、机に腰を下ろしたりすることもある。机は神聖なものであると考えてきた日本では、先生は机に腰掛けない。生徒も机に座っていたりすると注意される。といっても、日本の教室でも欧米化してきている。欧米人にとっては、机は単なる物質にすぎないのだ。

最近ワイトで一緒だったロンドン基地 CA と、訓練時代の話になった。

「そういえば、教室の机は、足が組みにくくなっていました。

机の下に棒があって、足を組もうとすると膝がぶつかるの。あれは足組み防止棒だったのですね？」

### 《教科書を床に置く》

教科書に対してのとらえ方も違う。教科書を大切に扱うようにと教えられてきた邦人 CA 訓練生たちは、教科書を床に置くようなことはしない。

モックアップ(模擬客室)訓練では、訓練生は制服を着用して、客席に座って授業を受ける。

このとき気になったのは、その授業に必要な教科書は、客席のテーブルに出しているが、それ以外の教科書を床に置いていたことだった。制帽も床に置いてしまう。それまで

あまり気がつかなかったが、その後注意深くみていると、教室でもテキストなどを床に置いていた。

「みなさん、訓練生にとって、教科書も制帽も大切なものです。大切なものを床に置くのを見ると、日本人はあまりよい印象を持ちません」

と注意する。その場では注意にしたがってくれるが、注意を怠ると、いつの間にか自分たちの習慣に戻っている。

乗務を開始してからも、出発前のブリーフィング(Briefing 事前打合せ)のときも、邦人 CA たちは、ショルダーバッグや制帽を空いているイスやテーブルの上に置くが、イギリス人 CA たちは、床に置いていた。室内でも靴を履いている欧米の家庭生活では、床も室内の一部と考えており、汚いという感覚はないかもしれない。

### 《ロンドン面接試験会場で》

採用試験の面接室には、面接官の前に、椅子が 5 個並べられている。応募者は部屋に入ってくると、椅子の前に立ち、最初に自己紹介をする。そして、「どうぞお座りください」と言われてから座る。この時もまた彼女たちは、座るなり足を組む。背筋はまっすぐ伸ばして座っている。足を組んでも、この時はリラックスするためではない。あくまでも自分を魅力的に見せるためである。

日本でも採用面接官をしたことがあるが、日本では、応募者が足を組むなどということは決していない。

### 《キスに注意》

社会生活上で注意した点は、

- \* 街中でやたらとキスをしない
- \* 歩きながら食べ物を口に入れない

がある。

日本では、キスは性にかかわるもので、秘めたる行為としてみられている。したがって人前では行わないのが普通だ。欧米人のキスには、性的なものや挨拶のためのものと 2 種類がある。出会いのキスや別れのキスは、欧米人にとってみれば、挨拶程度のキスなのだ。

東京訓練が始まってしばらくして、どこからともなく、ロンドン基地 CA が寮の近くでキスをしている、という噂が流れてきた。個人生活に関わることは、本人たちの自由であるが、マスコミはじめ世間は、青い目の CA たちに注目している。寮のまわりの住民たちも、彼女たちが新しく採用された外国

人 CA たちであることを知っている。まだまだ日本では、キスは淫らな行為と見なされている。「航空会社の社員ともあろう者が、街中でキスをしているとは…」と見られるかもしれない。抱き合っているキスについては、場所をわきまえるように注意した。

### 《キスの起源》

人間はどうしてキスをするようになったのか。これについて、医学博士の志賀貢氏は、本の中で次のように紹介している。「人間が狩りをして生活をしている頃、狩りに出かけるのは男、家を守るのが女と、役割が決まっていた。狩りにいった男は、獲物を追いかけるかたわら、家に残してきた妻が心配になる。

(何者かに襲われていないか)

(俺がいない間に酒や食べ物を出して

浮気しているのではないか)

と疑心暗鬼の心境である。狩りを終え、家に戻った男は、真っ先に妻の口を"味わう"。

「証拠が残っていればすぐに分かるはずだ」

これが狩猟民族たちのキスの起源らしい。

同博士は、独自の推測として、「男はまさか疑っているとは口にさせまい。そこでキスを愛情表現とか、一種の挨拶だとして女房を納得させたのではないだろうか。やがて周囲に広がり、現在につながっている…」

(資料)「ドクター志賀のウミミたいな雑学」永岡書店

### 《挨拶のキス》

現在のイギリスでは、挨拶のキスは頬にする。これをチークキス(Cheek Kiss)と呼んでいる。相手の唇にキスするのは恋人同士や夫婦くらいのものだ。ところが 1400 年代から 1500 年代にかけてのイギリスでは、挨拶のキスも相手の唇にしていたのだ。その頃、ヨーロッパの他の国では、挨拶で相手の唇にキスをする習慣はなく、イギリス人の唇へのキスによる挨拶はとても珍しがられていた。今では、キスといえば「フレンチキス」と呼ばれるほどキスが好きなフランス人でさせ、当時は、挨拶のとき、相手の唇にキスすることはしなかった。そのキスも、イギリスでは 1500 年代の後半には姿を消してしまい、現在のスタイルになってしまった。

15 世紀には、挨拶の時さえ、相手に接触することを好んだのであるが、現在のイギリス人は、ヨーロッパ人の中で、相



手との接触が一番少ない国民になっている。イギリス人は、挨拶のときでさえ、相手の頬にキスの方がよいのか、握手だけにとどめた方がよいのか迷うそうだ。

このよい例が、チークスの回数である。フランス人が、挨拶でチークスをするときは、ダブルキスといって、最初は左の頬、つぎに右の頬へと2回する。オランダ人とベルギー人はこれを最低3回は繰り返す。スウェーデン人は1回だけで済ます。イギリス人も同じで、1回なのだ。我が訓練生たちが帰国するとき、空港まで見送りに行った。出発の時間になると、全員がお別れのキスしてくれた。やはり1回だけだった。キスの仕方でもヨーロッパのどの国あたりの人か分かるのだ。資料「ヨーロッパ人人の奇妙なしぐさ」ピーター・コレット著 草思社

### 《歩きながら食べる》

歩きながら食べ物を口にするのも、イギリス社会ではごく普通の光景となっている。タミ文化の日本では、食事はタミに座って食べるものとされてきた。また、日本のたべものは、麺類に代表されるように水もの(汁もの)が多く、歩きながら食べるのには向いていない。一方、欧米では、サンドイッチ、ホットドッグ、ハンバーガーのようにドライな食べ物が主流なので、歩きながらでも食べることができる。狩猟中、馬に乗ったままでも食べられるものが、必要だったのかもしれない。アメリカ西部開拓時代も、何日も幌馬車に乗りつけて西部に向かうのであるから、保存が効くドライな食品が必要だったのだ。

### 《無賃乗車》

最近の改札口は、コンピューター化しているので、乗越し運賃を精算しないと改札口を通過できない。当時は、駅員に定期券を見せる方式だった。我が教え子たちは、京浜急行の羽田・北品川間の定期券を渡されていた。最初の頃は、右も左も分からなかったので授業が終われば、まっすぐ寮に帰ってきた。東京の状況が分かりはじめると、品川駅のまわりはけっこうおもしろそうだ、帰りに行ってみよう、ということになる。寮は品川駅からでも歩ける距離にあった。定期券で品川駅まで行ったのだが、清算をどのようにすればよいか分からない。だれかが北品川までの定期券で品川駅を降りてしまったところ、駅員は何も言わなかったらしい。「平気よ」ということが広まった。何人かが乗り越し清算をし

ないで、品川駅を降りているらしいと、筆者の耳に入ってきた。さっそく注意することにした。

外国人が日本にきて、日本のルールに従わないとき、日本人はどう対応してよいのか困惑してしまう。つい語学の問題が立ちだかってしまう。ずるい外国人は、日本語が分からないフリをして、その場をやりすごすことがある。日本人であれ、外国人であれルールに反していれば、毅然とした態度で注意をすることが必要だ。なにも英語で言う必要はない。日本語で注意してよいのだ。外国人をお客様扱いして甘やかすことなく、日本にいるかぎりは、一市民としての行動を要求することが、外国人を平等に扱うことになる。

### 《私好ハ淫ヲ女デハアリマセン》

訓練生たちは、廊下でだれかとすれ違うときは、声を出して挨拶するよう教官から言われる。

彼女たちの習慣では、会社の中で、同じ社員といえども、よく知らなければ、「コンニチ」と声を出してまで挨拶することはしない。また、見ず知らずの相手にニコニコすれば、誤解されるのが関の山である。そんなことをすれば、色目を使う女性と誤解される社会で生きてきている。

職場で女性社員が、だれかれ構わずに、「おはようございます」と挨拶をしているのは、日本では普通の光景になっている。

ヨーロッパ人も、もちろん知っている上司や同僚には、「Good morning!」とか「How are you?」などと言う。これは上司と部下、または同僚同士の関係においてなされている。しかし、無記名の相手に対しては、やたらとニココしたり、声をかけたりしない。

日本と欧米では、挨拶をする時の動作に大きな違いがある。日本では目が合えば、「おはようございます」と言って、すぐに頭を下げ視線をそらす。いつまでもニココして相手を見つめている必要がない。そのため、誤解されずにすんでいる。欧米では、挨拶の時に頭を下げることはしないので、いつまでも相手を見つめることになる。そのような動作を、知らない相手にすれば誤解される訳である。

それでも航空会社の顔として活躍してもらうためには、不特定の相手に対して挨拶ができるようにならなければならない。行動の習慣化をつけさせるために、これも訓練の一貫である旨、最初に話している。

実際には、習慣の違いから、こちらが思うとおりにでき

なかった。この時期の訓練部は、外国人の訓練生ばかりで、手本になる邦人 CA のタコたちがいなかった。イギリス人、ドイツ人、シンガポール人、中国人の CA 訓練生でゴった返している。つい彼女たちの習慣で過ごすことになってしまう。

その後の訓練で、ある時、他のクラスがほとんど邦人ばかりのときがあった。邦人 CA のタコたちが、廊下で大きな声で挨拶をしている。その姿を見て、外国人 CA 訓練生も、あれが日本のやり方なのだとなまねをするようになった。教官が言葉で一生懸命に説明しても、なかなか実行できなかったことが、日本人の集団の中に入れることで、挨拶ばかりでなく、他の日本の習慣も真似るようになった。いろいろな場面で、日本人がよく使う、「よろしく願います」という言葉もタイミングよく使えるようになった。

### 《私ハ敵デハアリマセン》

このように書くと、彼女たちが全然挨拶をしないかのように取られるかもしれない。彼女たちの弁護をしておいた方がよさそうである。

欧米は、多民族の集まりで成り立っている。また、ヨーロッパ社会では、征服したりされたり歴史が繰り返されてきた。イギリスもケルト人に始まり、そこにゲルマンの一部族のアングロサクソンが入った。11 世紀のノルマンコンクエストでは、ノルマン人がアングロサクソン系の王室を破り、それ以降ノルマン人が王室を引き継いだ。それとともにノルマン系の商人や騎士が入り込んできて、アングロサクソン系の人達と混ざり合ってきた。紀元前にはローマ帝国の侵略を受けている。

ヨーロッパは、768 年に即位したカール大帝（ドイツ名）によるゲルマンの統一があり、その後、それぞれの民族にナショナリズムが台頭し、別々の国家となったのである。その後も、中世から近世にかけて、戦いに明け暮れてきた。このことの反省からかどうかわからないが、欧米社会では、つねに自分は敵ではないことを表現する必要があった。手の中に武器を持っていないことを意味する「握手」も、そのような背景から、現代社会の重要なマナーになっている。異民族の集まりであるアメリカ人は、特にそうであるが、エレベーターに乗り合わせた時などニコッとする。自分の存在が相手を不安にさせるような時には、目が合うとニコッとする。日本では、知らない他人にニコッすることはほとんどない。むしろニコッと相手を見る方が多い。

### 《捻挫って何て言うの!》

泣きむしメニーが、1 日の訓練が終り、会社を出ようとしたところ、階段を踏みはずし捻挫 (Sprain Ankle) した。さあ大変である。何が大変かというと、医者に連れていくのも担任教官の役目だからだ。日本人ならば、自分で医者にも行ける。メニーは退社時に捻挫をした。この時間には病院はもう閉まっている。このような時、日本人だと痛くても「大丈夫ですから心配しないでください」ということが多い。その晩は湿布薬を貼ってようすをみる。

イギリス人は痛さに対して弱いことは冒頭で紹介した。涙を流さんばかりに、「もう歩けない」と訴えてくる。痛さに対する感じ方がまったく違う。日本人は、昔から、痛みに対しては、我慢するようしつけられてきている。ちょっとくらの痛さはガマンできる。イギリス人 CA たちは違っていた。

そこまで言われると、担任としても放っておくわけにはいかない。近くに救急病院がないか調べ、電話をかけ、診察をしてくれるか確認し、さっそく連れて行かなければならない。そして病院まで付き添っていく、さらに、今度は通訳をしなければならぬ。医学関係の英語は、専門的な単語が多いので、辞書を持って行く。治療が終われば、訓練生を送って行くか、一緒に付き添ってくれた同じクラスの訓練生とともに、タクシーに乗せて寮まで帰さなければならぬ。

### 《エッ、日本デハ治療費必要ナ!》

ドイツ人やブラジル人は、病気で欠勤することはほとんどなかった。ところがイギリス人の場合は、たまたまだったのかもしれないが、風邪をひいたり喉を痛めたりする訓練生が続出した。問題が発生したのは、治療費の扱いについてだ。会社の中には、最新の設備が整った診療所もある。整形外科、内科、精神科、耳鼻科、眼科の医師、それに最新検査機器である MRI やレントゲン設備もある。また、航空医学の専門医も常駐している。勤務時間内であるならば、会社の診療所に行けばよい。ところが時間外のときは、社外の診療施設を利用せざるを得ない。当然、そこでは治療費が必要となる。

ところが、外国人 CA の場合は、日本の健康保険に入っていない。そのため治療費を全額請求されることになる。訓練生自身も、海外旅行保険に入ってきていない。病気になったら訓練生自身が治療費を払わなければならない。この治療費というのが、ちょっとした病気でも、けっこう高

い。私たちは、健康保険があるので、初診料と治療費の一部を払えばよいが、イギリス人 CA たちの場合は、全額本人負担となる。

治療費の支払いについては、訓練生から、なぜ自分たちが払わなければならないのか、とブーブー言われた。イギリスでは、一部の私立病院を除き、治療費はすべてタダになっている。外国人といえども無料で診療してもらえる。「ゆりかごから墓場まで」と言われているように、社会福祉については非常に発達している。彼女たちの感覚では、病気になっても、治療費のことは頭にない。それが、訓練で東京に来ている間に病気になったら、高額な治療費を自分達で払え、と言われ頭にきている。

治療費の件については、次回の訓練から、訓練生が日本に来る前に、旅行保険に入らせることにした。傷病関係の保険は、訓練中のみならず、乗務を開始すれば、海外滞在中に病気になることもある。いずれは必要になる。邦人 CA も、日本の健康保険がきかない海外滞在中の病気に備え、会社で保険をかけている。アメリカなどで病気になったならば 10 万円単位のお金が必要になる。

### 《喉が痛入る》 sore throat

1 月から 2 月にかけての東京は、晴れた日が続く、湿度も低く乾燥している。一方、この時期のロンドン、雪こそ降らないが、とにかく寒くて汗拭している。空はどんよりとしており、冬場に太陽を見ることは少ない。寒くジメジメしている国から来た彼女たちにとって、東京のカラカウ天気は 180 度違う環境となる。乾燥しすぎて、ノドの痛みを訴えてくる訓練生が、これまた続出した。ノドをやられている人には、授業中、ノド飴をなめることを許可した。いつでも渡せるよう、担任も、生協売店で、訓練生のためにノド飴を買ってきた。邦人 CA もノドをやられることがあるが、それ以上にロンドン基地 CA は、ノドがあまり強くないようだ。ノドが弱いから風邪にやられることになる。3 分の 1 の訓練生が風邪気味となり、その内の何人かは発熱し欠勤した。休まれるくらいなら、授業中、ノド飴くらいというのが担任の思いだった。

### 《"湯冷め" って英語あるの！》

彼女たちは、「風邪」のことを、英語でフルー(Flu 流感)と呼んでいた。風邪をひくもう一つの原因がある。風呂上がりである。寮の風呂場は、大浴場スタイルになっていて1階に

ある。見ていると、彼女たちは、風呂を上がるとバスタオル一枚で部屋に上がろうとしている。部屋は暖房が充分効いているが、ロビーや廊下はそうでもない。邦人 CA たちは、女性であることもあり、風呂場へは銭湯に行くのと同じ感覚でいく。着るものも厚手のものであり、風呂上がり後も、ちゃんと着ている。ヨーロッパ人の生活習慣では、風呂を上がった後も、家の中は暖かくしているので、バスタオル一枚でも問題ない。しかも、風呂は身体を温めるために入るのではなく、身体をきれいにするために入る。したがってシャワーを浴びて終りという具合だ。身体もそんなに温まらず湯冷めをすることもない。そのような生活になれている彼女たちなので、つついバスタオル一枚で、その辺をウロウロしている。はじめの内は湯船に入ることに慣れなかった彼女たちも、みんなで湯船に入るのが楽しいことだと分かり、温泉気分風呂に入るようになった。そしてじゅうぶん身体を温めて出てくる。そのため、湯冷めをしてしまう。

### 《God bless you》

日本では、誰かがくしゃみしても、まわりの者は何も言わない。強いて言えば、くしゃみをしている子供をみて、母親が「寒くないの、なにか着なさい」というくらいだろう。

彼女たち社会では、誰かがくしゃみをする、"God bless you"と声をかける。声をかけられた方は、"Thank you"とお礼を言う。このときの "God bless you"は、「神のご加護あれ」ではなく、「お大事に!」という程度の意味になる。

英語圏では、だれかがくしゃみをする、一分間心臓が止まると言い伝えられているので、止まらないように祈ったのが習慣になったようだ。もし、くしゃみをして、周囲の人からこの言葉を言われたら、"Thank you" と礼を言うのがマナーとなっている。

### 《共同浴場は楽しい》

共同浴場スタイルの風呂に、最初の頃、馴染めなかったイギリス人 CA たちも、日本人の様子を見ているうち、少しずつ湯船に入るようになった。そのうち、温泉気分を味わえる風呂場は、話し好きのイギリス人 CA たちにとって、ちょうどよい社交の場となり、風呂を楽しむようになった。

北欧では、サウナは盛んである。もちろん、お互いバスタオルを身体に巻き付けている。サウナも一緒に入る点では、浴場

とそれほど違わない。イギリス人もドイツ人も、慣れてくると、共同浴場スタイルのお風呂に入るのをそれほど嫌がらなくなった。ただし、ドイツのサウナには、日本のサウナのような洗い場はない。身体を洗う時は、別の場所にあるシャワールームの中で洗う。シャワールームは個別になっているので、洗っている姿を他人に見られることはない。

実は、共同浴場スタイルの風呂で一番困っていたのは、中国系が多いシンガポール人 CA や香港中国人 CA だった。彼女たちの担任(女性)によると、中国系の人達は、母親や姉妹とでも風呂と一緒に入ることはないらしい。ましてや他人に自分の裸を見られるのは、ぜったい嫌だという娘が何人かいた。彼女たちの担任によると、日本に到着して間もない頃、ほとんどの娘たちは、下着をつけたままで浴場内に入り、湯船には入らずにまっすぐ奥にあるカーテン付きのシャワールームに飛び込む。そこで下着をとりシャワーで身体を洗っていた。湯船に入るのに水着をつける娘もいた。

シンガポール人 CA の担任に聞いたところ、風呂場での日本人の行動について、彼女たちの印象は、次のようなものだった。

- \*脱衣場で他人の目があるのに真っ裸になれる。
- \*裸になっても友人同士でお喋りをしている。
- \*恥ずかしがるそぶりを見せない。
- \*背中を流し合っている。
- \*ゆっくりと時間をかけて入浴をしている。
- \*腰掛けに座ったままで身体を洗っている。はじめ、腰掛けが何のためにあるのか分からなかった。
- \*湯船がとても熱いのに平気で入っている。
- \*他人がいるところで、平気で自分の大事どころを洗っている。

皆と一緒に湯船につかるのが楽しいと言っていたロンドン基地 CA たちも、他人がいるところでは恥ずかしくて、自分の大事どころを洗えないと話していた。あるドイツ人 CA が独り言のようにつぶやいていた、「立ち上がって洗わないと、大事どころがよく洗えないです！」

## 《門限時間》

この寮が開設して以来、門限時間は、夜 11 時と決められていた。この寮にいる邦人 CA たちは、決まりだから仕方

がないと、この門限時間を守ってきた。といっても六本木あたりで遊んでいたら、夜の 11 時は、これから興がのってくる時間であり、「門限が 11 時なので先に帰ります」などと言ったら、仲間からひんしゆくを買ってしまう。そこで門限までに帰ることができないときは、つい朝までいることになる。門が開くころを見計らって帰ってくる。中国人 CA やブラジル人 CA は、門限時間を過ぎてまで、夜通しで遊んでいることはなかった。門限時間事件が起きなかった。

ところが、ロンドン基地 CA たちが入寮するようになって、門限時間の問題が起こった。ロンドン基地 CA たちは、門限時間があるのはおかしいと言ってきた。彼女たちに言わせると、寮生活を送るのが子供たちならいざしらず、自分たちは大人である。自分たちを大人として扱ってほしい。また、訓練はきびしいのでストレスがたまる。どこかで思いっきり発散したい。そのためにも門限時間を緩和して欲しい、というものだった。

「君たちは、CA になるために訓練を受けている。会社は、君たちが訓練に専念してくれることを希望している。夜遅くまで外出していると、次の日の訓練に影響が出てくる。門限は守ってもらいたい」

門限を夜 11 時にしているのは、それなりの理由があった。ひとつは寮監さんたちやガードマンの勤務時間の問題だった。門限時間を遅くすれば、11 時以降のために新たにガードマンさんを雇わなければならない。それだけ、寮の管理費がかかることになる。また、この寮は女子寮であり、日本の発想では、会社は親御さんから娘さんたちを預かっているという思いもある。そのため、預かっている娘さんたちに何かあってはいけなないと考え、門限を 11 時に決めていた。深夜に出入り自由にしておくのは物騒なので、11 時になると門を閉めていた。

「どうしてもダメなら、せめて週末だけでも、門限時間をなくしていただいけませんか。お願いします！」

訓練部内で検討した結果、部長からも、「週末だけならいいだろう」と許可がでた。部長から OK が出ても、寮は、社員の福利・厚生を扱う本社部門の管轄となっている。幸いなことに、担当部もこころよく協力してくれ、新たに雇うガードマンの予算もとってくれた。次の週から、週末は門限を気にせずに、思いっきり息抜きができるようになった。寮住まいの邦人 CA たちからも、週末だけとはいえ、朝まで待つて



帰寮する必要がなくなったので感謝された。

### 《規則とルール》

問題が起きると、何でも担任に言ってくる。彼女たちにしてみれば、何でも話せるのが担任なのだ。そこで担任も、第一声は、現行規則つまり会社の意向を守るように伝える。そうは言っても、ヨーロッパ人 CA 訓練は初めてであり、なにもかも手さぐり状態である。今までのやり方は、日本社会だけに通用するものだったかもしれない、という気持ちもある。欧米人を雇うようになれば、欧米人にも通用する規則が必要になってくるかもしれない。問題が起きるたびに、彼女たちと話し合いを行うようにした。そして、彼女たちの言い分が納得のいくものであれば、教官会議にかけ、課長、部長も交えて検討をする。彼女たちの言い分が、説得力があるからといって、何でも欧米スタイルにするわけにはいかない。ここが、間に入った担任が苦勞するところなのだ。場合によっては、ルールはルールと言って規則を変えないこともある。むしろ、日本の会社の社員として働いてもらう以上、会社の方針に従ってもらうしかない。それに従う、従わないは本人が決めることである。企業独自のルール、社会規範としてのルール、社会価値観としてのルールといろいろある。国が違っても社会規範はどの国も共通の部分が多い。社会規範にかかわることについては、あまり問題は起こらない。しかし、価値観の違いと企業独自のルールについては、育った環境によって相違が出てくる。門限問題もそのひとつだった。

### 《八百屋から苦情》

あるとき、駅前の八百屋さんで、邦人 CA たちが買い物をしていると、その店主に苦情を言われたと報告が入った。話を聞いてみると、「シンガポール人 CA が、買う前に、くだものや野菜をよく触るので困る」と言っているとのことだった。

シンガポールでは、たしかに生鮮食品を買う前に、品物を手にとって品定めをするのが習慣になっている。少しでもよい品を見つけようと、ひとつひとつ手にする。日本の店先でも主婦たちがくだものを触ることがあるが、あれこれ手にしない。そこにおいてあるくだものの中から、せいぜい一つだけ手にとってみて、よければ買う。店側も、同じ山になっているくだものは、どれも同じだと自信を持って置いている。

それを、あれもこれも触られたのでは、かなわないというのが、店主の言い分なのだ。店先での買い物の仕方の違いが、八百屋さんで起きた。

### 《タバコのマナー》

当時、日本でも、タバコを吸う女性がけっこういたが、ヨーロッパ人女性もよく吸っていた。私のクラスでは、半数近くが吸っていた。休憩時間にお茶をしながら一服している。タバコを吸わない娘たちも、タバコの煙をあまり気にしていない。

彼女たちは、自分が吸いたい時は、必ずまず相手に1本すすめる。それがひとつのエチケットになっている。当時のイギリスでは、タバコの値段が日本の倍以上した。値段が高いのに相手に勧めるのは、相手が、タバコを吸うのか吸わないのかを確認する手段にしている。吸わない相手であれば、1本勧めたことによって、タバコを吸う許可を暗黙のうちに得ているようだ。吸う相手には、「1本いかが」と本当によく勧める。それがひとつのコミュニケーションになっている。日本では、相手にタバコを勧めることはあまりしないが、彼女たちがタバコを吸うときの習慣も違っていた。そういうロンドン基地 CA たちだったが、時代が変り、タバコを吸う女性も減ってきている。

### 《嫌煙権事情》

米国、特にカリフォルニアやニューヨークやハワイは、喫煙者にとって、居心地がよくない街だ。

その点、ヨーロッパの国々では、タバコに対してもっと寛容的なところがあった。ドイツでは、政府が国内区間全面禁煙の法律を作ろうとしたところ、国民からかなりの反対意見が出たと、日本の新聞が報じていたのを思い出す。その理由は、タバコを吸う人たちはタバコ税を払っている。国もタバコ税があるお陰で助かっているではないか。なんでもかんでも禁煙というのは反対だ、というのがドイツ国民の考え方のようなので、と新聞が報じていた。このような国民性なので、街中のほとんどのレストランでは、タバコが吸えた。

乗務でフランクフルトに行ったとき、邦人 CA たちと、ハイデルベルグに観光にいった。ハイデルベルグは、フランクフルトから特急電車で約2時間のところにある。列車に乗ったとたん、うれしくなったのを覚えている。その特急は、典型的なヨーロッパスタイルの客車で、内部は6人掛けの個室になっていた。ところが、うれしいことに、客車の中央が透明ガラスで仕切られて

おり、前方半分は禁煙席、後方半分は喫煙席となっていたのだ。もちろんお互い行き来ができるようになっている。ドアも透明なのだ。

なぜうれしかったかという、何人かでの旅行では、皆で同じ客車にいたい。そのため、たいてい禁煙車が喫煙車のどちらかにしなければならぬ。喫煙車にすれば、タバコを吸わない人達が我慢をしなければならず。禁煙車にすれば、喫煙者が我慢をする。

この列車では、タバコを吸わない人も吸う人も、透明ガラスを間にして、お互い近くに座ることができた。喫煙者もタバコを吸わないときは、禁煙席の仲間と一緒にたのしく過ごせるし、吸いたければ喫煙席側にいけばよいのだった。ドイツでは、なんでもかんでも禁煙ではなく、お互いが共存できるようにしている。フランスも、アメリカがやることをあまり真似しない国の一つだ。花が咲き乱れる頃でも、落ち葉の頃でもパリのカフェでお茶するのはなんともよいものだ。冬、パリの街を散策している途中に立ち寄るのもよい。筆者も、カフェでカフェオレでも飲みながら、読書するのが好きだ。

カフェは、お茶だけでなく、お酒も飲める。フランスのカフェは、お茶にしてもお酒にしても、タバコの煙をくゆらしながら楽しむものだ、と言わんばかりに、どのテーブルにも灰皿が置かれていた。

ヨーロッパでも、禁煙政策をとっている国は多い。しかし、人々が楽しんでいる時や場所まで、禁煙を強いていない。これらは1990年ごろの話である。

### 《ドイツ人 CA の採用》

イギリス人 CA の東京訓練に引き続き、ドイツ人 CA の訓練も始まった。ロンドン基地の場合と同じように、1 期を男性教官、2 期を女性教官が担任する。ドイツ人 CA は、主に、北ドイツ出身者を採用した。会社のドイツにおける拠点がフランクフルトにあったのも理由の一つである。

北ドイツの人たちは、工業の発達した北ドイツの方が、南ドイツよりレベルが高いと言ってはばからない。反対に、南ドイツ出身者は、北ドイツが好きでないと。日本でも、関東人と関西人はお互いに張り合っている。それに似たようなところがドイツにもある。なにも日本やドイツだけではなく、北と南、西と東は、どの国でも、お互い張り合っている。国と国の関係でも、南北問題や東西冷戦のように、歴史の中でも紛争が絶えなかった。

ドイツ支店と本社の客室担当部門でいろいろ検討した結果、主に北ドイツ系の人たちを採用しようということになった。ヨーロッパ人 CA の採用は、初めての試みである。ドイツ支店側も、何とか成功させたい、との願いもあった。フランクフルト支店側も熱が入っていた。日本人たちとうまくやって欲しいとの願いもあった。当時の邦人 CA は、若い人達の場合、10人中7人前後が、大卒で占められていた。

### 《アビチュアー》

当時のドイツでは、大学、短大に行く人は、10人中0.8人前後だった。ちなみに、日本では4人以上進学していた。最近では、ドイツでも進学率が高くなってきている。ドイツも国際競争に勝つためには、高い教育レベルが必要である、という風潮が高まってきている。

ドイツでは、大学に行くためには、「アビチュアー」(Abitur)という大学入学資格試験に合格しなければならない。この資格試験は猛烈にむずかしく、パスすると、自分の好きな大学に応募できる制度になっている。一旦入学しても、途中で違う学問を勉強したければ、別の大学に変更することもできる。

レベルの高い人を採用したいのだが、大卒がそんなにいる訳ではない。大学まで出て CA になる人もほとんどいない。大卒からの応募があっても、ほとんどは転職者であり、25才を過ぎてしまっている。やはり、そこは日本の航空会社である、できれば CA は若い方がいい。就職を有利にするために「アビチュアー」をとっている人がけっこういる。大卒でなくとも、「アビチュアー」を持っている人を中心に採用したのだ。この採用条件が、担任教官にとって、なんと大変なことになるのである。

### 《私ゼツタイ嫌ナノ》 お辞儀=Bow

日本式の起立・礼について、ロンドン基地 CA の時は、特に問題にならなかったが、ドイツ人 CA 訓練生の間でトラブルが発生した。現地訓練でも、日本のやり方に慣れてもらうため、授業の始めと終わりには起立・礼をさせることにした。また、日本のマナーについての授業も行った。お辞儀の仕方や座り方、歩き方、さらに日本で、女性が求められる立ち振舞いについての授業もある。その中には、女性が公衆の面前で煙草を吸うと、どのように見られるか、と言うようなことも含まれている。

ところが、ドイツ人 CA の何人かが、日本式の礼をするのは絶対にイヤだ、と言っている。ある訓練生は、泣いてまで抵抗し拒否している。担任も困ってしまった。東京訓練の開講式は、日本式で進めなければならない。そして、日本のやり方を教え、それをさせるのも担任の仕事なのだ。訓練部長が出席する開講式までには、日本の礼法を覚えさせなければならない。邦人 CA ならば、教官が何かを言えば、素直に指示に従うのだが、ドイツ人 CA はそうはいかない。

「どうしてそんなやり方で挨拶をしなければならないのか」と抵抗している。

邦人クラスでは、日本文化についての授業はないので、教官たちも、日本文化についてあらためて勉強している訳ではない。日本人が挨拶の時、なぜお辞儀をするのか、今まで考えたことがないし教えて来てもいない。一方、邦人 CA たちには、国際人として恥ずかしくないよう欧米マナーを教えている。なぜ欧米では、握手をするのかは教えている。ところが、日本式のお辞儀は、どのような理由から頭を下げるようになったのか誰も知らない。知らないけれど、正しいお辞儀の仕方を、いつの間にか身につけている。

### 《私はストリッパーではアリマセン》

はじめのうち、どうしてドイツ人 CA たちがお辞儀を嫌がるのか判らなかつた。それより、邦人 CA たちなら、素直に従ってくれるのに、ドイツ人は頑固でやりにくい、という感情が教官の間に広がってしまった。

「いちいち聞かれたって分からないわよ」

という思いが先にたち、何人かの教官がイライラしている。担任は、一生懸命説明するのだが、うちがあかない。ドイツ人 CA と教官の間でやや陰悪なムードが漂ってきた。訓練課長も困ってしまった。

訓練当初の段階から、感情の行き違いが起きてしまっている。それでも根気よくドイツ人 CA たちと話しを続けた。すると、あるドイツ人 CA が教えてくれた。

「お辞儀をする動作は、ストリッパーのしぐさによく似ているので、ドイツでは絶対しない」

とのことだった。頭を下げることも嫌だが、その時に、両手を前で重ねる動作がどうしてもできない、ということが分かった。

その昔、アダムとイブは裸だったので、自分の大事なところ

を両手で隠していた。現代では、裸になり大事なところを隠すしぐさをするのはストリッパーだけなのだ。教養ある者は、そのようなしぐさをしないというのが、彼女たちの言い分だった。なぜ嫌がっているのか分かり、「そうだったのか」と変に感心してしまった。

ある時、何気なく NHK ラジオの文化講演会を聞いていたら、当時、通訳として日本で第 1 人者の松村増美さんが講演をしていた。話の内容はアメリカ留学中の体験談だった。ある時、スピーチコンテストに出ることになったそうだ。壇上でスピーチをする時に、してはいけない動作ということで、やはり同じことを話していた。彼が、教授に注意されたことの一つに、壇上で挨拶をする時や話をする時は、絶対に両手を体の前で組んではならないということだったそうだ。日本人にとってはごく自然の動作であるが、欧米にとっては違和感のある動作であり、観衆の目がそっちの方に行ってしまう、折角のスピーチも台無しになってしまうそうだ。

### 《命を差し出す》

ドイツ人 CA たちが、なぜお辞儀するのを嫌がるのか判明した。彼女たちの言い分もうなずける。それでも、日本の航空会社で CA になる以上、お辞儀は不可欠なものとなる。何とか説得しなくてはならない。ドイツ人は論理的思考を大切にしている民族と聞いている。「お辞儀」を論理的に説明できないだろうか、いろいろ調べてみた。お辞儀の角度は何度だとか、お辞儀はゆっくりしなくてははいけないとか、その仕方はマナー関係の本にいくらでも書かれている。ところが、どの本も、お辞儀の動作自体が、何を意味するかについて書いていない。ひとつだけ分かったのは、その昔、平民は天子の顔を見てはいけない、というのがあった。

そこで、欧米人の挨拶のひとつである握手に、何かヒントがないか考えてみた。握手は自分が敵ではないことを示す動作である。お辞儀も同じように、自分が敵でないことを示す動作ではないだろうか。お辞儀の動作は、相手に首を差し出す動作である。お辞儀して頭を下げるというのは、自分の身体の中で一番弱いところ(一番大切なところ)を相手に見せる動作である。そこを殴られれば死んでしまうかもしれない。ということは、お辞儀をすることにより、相手に命を差し出すという意味になる。そして、それは相手に敬意を示す、ということになるのではないか。また、手を組むのは、手を押さえていますので、あなた様に危害が及ぶこ

とはないですよ、と表現しているのではないか。もしかしたら勝手な解釈かもしれないが、おおむねそれに近いのではないだろうか。それ以後、ヨーロッパ人 CA たちに対して、「お辞儀は相手に敬意 (Respect) を示す上で、日本でもっとも大事な動作である」と教えるようになった。

はじめの頃、抵抗していたドイツ人 CA たちも納得してくれた。自分たちの価値観で、相手の文化をみると、異文化摩擦が起きる典型的な例だった。

「背広とちよんまげ」(加藤英明、アントニー・ホルバート共著)によると、

『西洋人はお辞儀をするのに強い抵抗感を覚える。あるアメリカの外交官は、ある時、東南アジアの某国の国王から勲章を授けられることになったときに、この地域の習慣に従って、頭を下げるように前もっていわれたが、直立したままですませた。この外交官は「私は人間に対しては頭を下げない」と語った』

『ヨーロッパにおいても、長いあいだ人々がお辞儀をした時代もあった。今でも、ヨーロッパの宮廷やドイツやオーストリアの上流階級では、頭を下げるという習慣がある。東西の違いといえば、西洋では軽く頭を下げるということである。ヨーロッパで、人々が近代に入ってからお辞儀をしなくなったのは、お辞儀が封建制度 (Feudalism) と結びついた後進的なものであって、近代民主社会にふさわしくないと見なされたからである』

同じ顔をしているからといって、相手が味方であるとは限らない。自分は自分で守る精神がはたらく。やたらと他人に対して自分の弱み(頭を差し出す)を見せないのが、欧米人の生き方のようだ。

### 《制服受領》

東京での訓練が開始されて早々に、ロンドンで採寸した制服の準備ができたと連絡がきた。さっそく、訓練生を連れて制服センターに行くことにした。

ロンドンでの採寸時に決めたサイズの制服を受領し、試着するのだが、どうも合わない、と何人かが言っている。

まず、腕の長さが違う。欧米人は日本人に比べ、腕が長い。というよりは、日本人の胴と腕の長さの割合と、欧米人の割合が違う。通常、上着のサイズは、丈の長さで袖の長さ

も決まる。必要に応じて、袖丈を長くしたり縮めたりするが、吊るしの服でも、日本人であれば、あまり袖丈の調整をしなくて済む。

日本人旅行者が、欧米で洋服を買うとき、袖丈が長すぎて困るのは、反対の現象だ。袖が長いのは詰めればよいが、短いのを長くするのは限界がある。何人かは袖が短すぎて特注せざるを得ない。あと 2、3 日すると、制服を着用しての訓練が始まるが、間に合わない。制服がもらえないとしょげている。

制帽も合わない。ロンドンでは、彼女たちの頭のサイズが小さいのに驚いた。案の定、用意してある一番小さいサイズの帽子でも、大きすぎて困っている訓練生がいる。やむを得ず、一番小さいサイズを貸したが、何となくしっくりしない。顔の前面から耳までの長さも違うので、余計しっくりしないのかもしれない。日本人に比べ、やや長いことも分かった。

### 《私ダイエット中ナ》

体型も、日本人やアジア系の人達と欧米人で違う。胴長短足の日本人に比べ、欧米人は足が長いことは、誰でも知っている。もうひとつ違う点がある。欧米人は、油断をするとすぐ太り始めるのだ。そのため、ロンドン基地 CA の場合、肥満度が一定の割合を越えてしまうと警告書が手渡されるシステムを採用した。

久しぶりに教え子に会うと、昔のスラッとした面影がすっかりなくなってしまっている者がいた。腰まわりが太くなっている。顔は相変わらず小さめであり、膝から下は細いのだが、腰まわりに肉がついてしまっている。彼女たちは、最初に、腰に肉が付きはじめ、その後、序々に上半身全体が太りはじめる。ちなみに、英語では、「太る」を "Gain weight" といい、「体重を得る」という意味になる。

欧米人の場合は、体質的に太る傾向にあるので、常に注意しないとダメなのだ。イギリス人 CA たちは、食べ物に注意しており、特に、脂肪分や糖分の摂取を控え、野菜類を好んで食べている。筆者自身は甘いものが好きで、チョコレートや和菓子に目がない。それらを教え子たちにすすめるのだが、断られることが多い。そして、一人前の CA になった後も、彼女たちは東京滞在中、時間があると感心するくらいフィットネスクラブに通っている。それくらい努力していないと太ってしまう。



これは、体質と食べ物の違いによる。モスクワで食事をした次の日は、便の色は真っ黒になる(汚い話でスマセン)。寒い国では、その寒さに耐えるために、脂肪分やカロリーの高い食品の摂取が大切となる。ロシア料理では、ボルシチというスープを飲むと分かる。おいしいがとても油っぽい。料理は、一般的にカロリーの高そうなしつこい味のものが多い。世界 3 大珍味のひとつであるキャビアもそうだ。あまり食べると鼻血が出そうになる。寒さと戦うために摂取した脂肪も、代謝が悪ければ、身体中にたまってしまふ。

イギリスも、平均気温は日本に比べ低い。そして、日本より寒くて長い冬が続く。しかもシトシとした空模様である。きびしい自然との戦いのなかで、いつの間にか、脂肪をため込む体質ができ上がってしまったのだ。

### 《菜食主義》

自分たちの体質を知っている欧米人の中には、「ベジタリアン」(Vegetarian)と呼ばれる菜食主義者が多い。

欧米の若い女性の場合は、美容と健康の観点から、脂肪の摂取を控えるために、菜食主義になることが多い。日本の菜食主義は、元来、宗教から出てきている。仏教では菜食を勧めている。日本では精進料理が有名である。動物性たんぱく質の摂取の少ない国では、太っている人たちも少なく、脂肪太りによる病気も少なかった。欧米人もこの点に着目し、自分達の食生活を変えはじめている。

因みに、食物学では、肉食は人間を戦闘的にすると考えている。アメリカは戦争に勝つために、食物学も研究し、兵士に肉をどんどん食べさせていたと何かの本で読んだことがある。食生活が菜食中心になると、人間は戦闘的でなくなり、また、いろいろな欲望も少なくなってくるそうだ。仏教が菜食を勧めるのにもちゃんと理由がある。

### 《うぶ毛は剃らない》 Baby Hair, Downy Hair

「Beauty Lesson」の授業で、顔パックを行ったときのことである。パックが乾き、ゆっくりと剥がしていく。ところが、剥がすときになって、何人かが涙を流さんばかりに痛がっている。うぶ毛がパックに張りついてしまい、スネに貼ったサロンパスを剥がすときの痛さと同じらしい。

休憩時間に皆と話していると、この話題になった。彼女たちは、顔パックをほとんどしないそうだ。ロンドン基地 CA に接していると、彼女たちのうぶ毛 (Baby Hair) に気がつく。

人によっては、鼻の下に薄いひげが生えているように見える。「どうして顔のうぶ毛を剃らないのか」と聞いてみると、「私たちの習慣では、首から上の部分は剃らないのが普通なのです」

「首から下の部分で、露出しているところは、脱毛したり剃ったりしますが……。腕や足が毛深いと、Rude(野蛮)に見られるのです」

というのが、彼女たちの返事だった。

そのようなことがあってから、欧米人をみると、うぶ毛が気になってしょうがない。よく見ると、やはり剃っていない女性が多い。この習慣はどうも宗教に関係があるらしい。

### 《硬水と軟水》

イギリス人 CA といえども、制服着用時のヘアスタイルは、食品を扱うものとして清潔感がなければならない。仕事に髪が揺れるようでは、髪の毛が落ちたりするので、シニオンにするなどしてまとめなければならない。いったん仕事を離れば、彼女たちの好きなスタイルでよい。当時のイギリスでは、若い女性の間でアフロっぽいヘアスタイルが流行っており、どちらかというとフワとした感じのヘアスタイルを好んでいた。それが、日本の水でシャンプーをすると、ドライヤーをかけてもふわとした感じに仕上がらず、髪がぺちゃっとしてしまふと嘆いていた。

どうも水が合わないらしい。ヨーロッパは硬水の国が多い。一方、日本は軟水の国である。硬水の国では生水をほとんど飲まない。カルシウム・マグネシウム塩を多く含んでいるため、飲むと下痢を起こしたりするからだ。石鹼も泡立ちが悪い。硬水に慣れたイギリス人の髪には、軟水は相性が悪いようだ。

### 《オオカミの牙》

イギリス人にしてもドイツ人にしても、感心するのは、みな歯並びがきれいなのだ。八重歯がある人は、1 人もいない。

「日本では、八重歯(Double Tooth)の娘は、かわいらしく見えるので男性に好かれるが、君たちの中に八重歯の人は 1 人もいないね」

「私たちの国では、歯並びが悪いと、かならず子供の頃に矯正します。八重歯は、ドラキュラみたいで男性に好かれません」

確かに、欧米の国で八重歯の人を見かけることはほとんど

どない。むしろ、フランスなどでは八重歯のことを「オオカミの牙」とよび忌み嫌っている。そのため、親は子供の八重歯を見つけると矯正させる。八重歯を見せてのブリッ娘も、日本では通じるが、欧米では嫌われている。

国際線 CA をやるのであれば、八重歯は矯正しておいた方がよいと言える。

### 《地震に会う》

米語では、地震のことをアースクエーク(Earthquake)と言うが、イギリス人はアーストレマー (Earth Tremor)と呼ぶ。

ロンドンでの授業の最後に、東京に来るにあたっての諸注意を行なった。その中で地震についても触れておいた。念のために、地震ついでの話をしたのだが、東京での訓練が始まって2週目に入った頃、早くも地震に見舞われたのだ。震源地は茨城県で、東京でも震度4を記録した地震だった。夜中の2時頃だったので、彼女たちは熟睡していた。そこに震度4の地震である。震度4といえばかなり揺れる。地震になれている日本人でも、火の元を確かめたりするし、少しは緊張する。しかも、10階建ての寮で、彼女たちの部屋は、上層階だったからたまらない。震度4以上の揺れになった。

寝ていた彼女たちは、何が起きたのか、とっさには理解できなかったらしい。とにかく天地がひっくり返るようなことが起きている。建物が揺れている。いつまでたっても揺れが収まらない。さらに何か起きるのではないかと、恐怖心でいっぱいになり、だれもが部屋を飛び出してきた。あちこちで「ワーワー、キヤーキヤー」と大騒ぎになってしまった。すぐに揺れが収まると思っていた寮監さんたちも、階上での騒ぎに起きてきて「大丈夫、大丈夫!」と、皆を安心させるのに大変だったらしい。

次の日、みな寝不足の顔をしている。さっそく地震の話題になった。このような時の解説役はいつもワニーが行う。

「教官、昨日は大変だったのだから」

と微に入り細に入り、手振り身振りで説明してくれた。こんな経験は、だれもが初めてだと話していた。他のクラスには、地震が嫌で、飛びはじめたすぐに辞めてしまった CA がいた。

### 《浅草見物》

当時の訓練では、外国人 CA に東京見物をさせるという

のがあった。日本のことをできるだけ知ってもらいたいとの願いがあった。

東京タワーや皇居見物が終り、〈はとバス〉が次に向かったのは浅草だった。ガイドさんの説明によると、浅草は、海苔<sup>のり</sup>で有名くらいで、その昔は近くまで海だったそうだ。観音様は、隅田川の底に沈んでいたところを、漁師に拾われ浅草寺に奉られた、という言い伝えがあるとのことだった。645年頃の話だそうだ。キャンという会社は、観音様に囚んでいるらしい。キャンをローマ字にすると、Kannon であるが、それが Cannon となり、キャン(Canon) となったそうだ。

雷門を入り、仲見世を歩き、突き当たった正面に、観世音菩薩(観音様)が奉つてある浅草寺がある。そして、右側に二天門があり、そこに入ると、三社祭りで有名な浅草神社がある。よく考えると、浅草って、仏様と神様が一緒に住んでいる寺町なのだ。

「これは Temple で、あれは Shrine ですか? Temple と Shrine が一緒の場所にあるんですか? ケンカはしないのですか?」

とジャネットが聞いてきた。また質問である。

「ジャネット、神道は、日本のオリジナル宗教であることは知っているね。仏教は、6世紀中頃(538年)に、今の韓国を経由して日本に入ってきたんだ。イギリスにキリスト教が入ったのが597年なので、同じような時期に、日本には仏教が入ってきたんだ。当時、仏教は外国の宗教ということで、“入れる、入れない”で大論争が起こったんだ。なぜなら、日本には神道という日本古来の宗教があったからだよ。大論争の中、当時の欽明天皇は、“試してみよう、良くなかったら受け入れるのをやめよう”という意見だったんだ。天皇の意見にしたがって試すことにしたんだ。その後、7世紀になり、聖徳太子(Prince Shotoku)が積極的だったこともあり、仏教は日本に定着したんだ」

日本ではいたるところにいろいろな神様がいる。日本には八百万の神がいるのだから、一つくらい外国の神がいたってよいではないか、と考えたかどうかは分からない。しかし、日本人が宗教に対し柔軟なのは、歴史的に言えば、欽明天皇の時代に芽が出ている。土着の宗教を排除してきたキリスト教徒には理解しにくいところである。

### 《日本は柔軟な国》

日本人は、外国文明を積極的に取り入れ、それを日本風

にアレンジし、定着させるのが得意な民族だ。料理も世界のものを取り入れてきた。

日本で食べる外国料理は、西洋風日本料理といった方がよいと思うときがある。特に、味付けが日本人好みになっている。

タコスという料理がある。メシコの田舎町でタコスを食べたことがあるが、線香臭くて一口であきらめた思い出がある。タコスなんて日本では売れないだろうと思っていたが、いつの間にかタコスの店があちこちでできていて、若者たちが食べている。あんな線香くさいものよく食べられるな、と感心していたら、日本人が食べられる味付けになっていた。

外来語も同じである。昔から外来語を取り入れてきたが、いつの間にか外国人に通じない外来語になってしまっている。漢字にしても、カタカナ外来語にしても、中国人や欧米人に通じないものが多い。漢字は、筆記すれば、意味が通じることもあるが、発音はまったく違ってしまっている。

#### 《カタカナ読み》

イギリス人 CA への日本語授業では、外来語をカタカナ式発音で教えることになる。機内では免税品を扱っている。その中に、たばこのマイルドセブン(現在名セブス)がある。

「マイルドセブンは1カートン 1400 円です」

とテキストに出てくる。彼女たちは、つい「Mild Seven」と英語読みで発音してしまう。ところがこれではダメなのだ。

「Mairudosebun」と発音させ直さなければならない。

今、この原稿はパソコンで打っている。「パソコン」といっても外国人にはなんのことか分からない。「パーソナルコンピューター(Personal Computer)」と言わなければ、英語国の人には通じない。

日本人は、昔から好奇心が強かったせい、自分たちにはないものがあると、それが気になってしょうがない。すぐに関心を示し、取り入れ自分たちなりに消化してしまう。そして、日本風にアレンジしてしまう。ところが、外国は違う。たとえばフランスは、中華思想が強く、自分達の文化が一番であると自負し他国のやり方をなかなか受け入れない。日本は、それとはまさに正反対の態度をとってきたのだ。

ドイツ人 CA のお辞儀事件もそうであるが、ドイツ民族も、他国文化に対しては慎重なところがある。ドイツやフランスのような大陸の国々は、お互いに侵略したりされたり歴史を持っている。他の文化を受け入れるということは、相手国に

侵略されるのではないか、という民族的恐怖心を潜在的に持っているようだ。一方、国内での勢力争いはあったものの、日本人は、敗戦後の進駐軍時代を除き、他民族に侵略された経験がない。

そのようなわけで、日本人は、異文化や他の文明に対して、かなり柔軟な国民なのだ。これも、実は欽明天皇の時代、隣国の百済国より、宗教だけではなく、いろいろな文明や文化が入ってきた。さらには、儒教も入ってきた。そして、中世から近代にかけての日本人の関心は、宗教のような思想的なものから物質的なものへ移っていった。ホルムガルやオランダのような国に注目し、鉄砲に代表される鑄造技術や造船技術などを取り入れるようになった。一時鎖国政策により、西欧文明の受け入れを拒否したが、明治の文明開花では、西欧文明を積極的に取り入れた。特にイギリス、フランス、ドイツの影響を受けたのである。戦後は、アメリカの影響という具合である。

#### 《英国国教会》

もしジャネットが他の宗派だったら、同じ質問はしなかったかもしれない。プロテスタントの中でも、戒律の厳しいメソジスト派の信者だったからだと思う。

イギリスは 16 世紀半ばに、当時の国王ヘンリー 8 世の離婚問題をきっかけにし、宗教改革の影響もあり、ローマカトリック教会から離脱した。そして、イギリス独自の英国国教会(The Church of England)を設立した。それ以来、イギリス国民は英国国教会を自分たちの宗教としてきた。最近では、国王を長とする英国国教会の影響力もずいぶん衰えてきているようだが、それでも、生まれる子の 3 分の 1 は英国国教会で洗礼を受けていると聞く。

ジャネットのように宗教に関心を示した娘もいるが、ほとんどのイギリス人 CA たちはあまり関心がない。むしろ、仲見世通りにあるおみやげ屋で、昔ながらの日本的なもの、例えば広重の絵が入ったゆかたや扇子や日本人形を売る店々を覗いていた。若い人たちの宗教離れはどここの国でも同じである。それが英国国教会の悩みであるとも聞いている。

#### 《お宮参り》

浅草のあと、椿山荘で昼食となり、それから明治神宮へと向かった。

バスは原宿駅裏側の駐車場に入り、そこから本殿まで参道を歩いた。2月の神宮は、正月の賑わいが終りひっそりとしている。

明治神宮は、明治天皇、昭憲皇后を奉るために、多くの人々の労働奉仕を受け、大正9年(1920年)に完成した。宝物殿には、両陛下が愛用した品々が集められている。明治神宮は、内苑が3万坪あり、競技施設などがある外苑は10万坪の広さになっている。

明治天皇の時代は、日本とイギリスの間に日英同盟(Anglo-Japanese Alliance Treaty 1902年)が結ばれていた。戦争中を除き、それ以来、日本の皇室はイギリスの皇室とよい関係にある。皇太子(The Crown Prince)もイギリスに留学していた。

「私がスーパーバイザーとして乗務していた便に、アン王女の結婚式に参列するため、ロンドンに向かわれる浩宮様(現皇太子殿下)が、お乗りになったことがあるんだ。私は、機内サービスの責任者だったので、直接お話しもできたんだ。私のよい思い出の一つになっているよ」

本殿の参拝が終り、何人かと今の話しをしていたところ、本殿の方が気になってしょうがない様子のティッシュが、

「あの…」

「どうした、ティッシュ」

「さっきお祈りをした所に、中年の女性が赤ちゃんを抱いて、そのそばに若い女性がいて、一緒に参拝しています。何か意味あることなのですか?」

「ティッシュ、あれは"お宮参り"と呼んでいる」

「Omiyamairi!?!」

「子供がすくすくと育つように祈りにきているのだよ」

「I see.」

ティッシュは、「I see」とは言ったものの、スッキリしない顔をしている。説明した私の方もスッキリしない。「子供の成長を神様に祈りにきた」には違いないが、お宮参りの本当の意味は何なのか、なぜ神社でなければならないのか、気になってしょうがない。言語学者の荒木博之氏によると、

『産の忌みの終りと照応して初宮参りが行われるが、これは生児の氏神に対する氏子入りの意味を担うものであり、村落共同体の象徴である神に詣でることによって、村人の仲間に加わったことの承認を受けるもの』

であつたらしい。お宮参りとは、「それぞれの村にいる氏神さまの氏子になること」が本来の意味なのだ。氏神さまは、

お寺ではなく、神社にまつられている。だから神社にお参りに行くのだ。

本来の意味が分かれば、イギリス人に説明しやすい。キリスト教の世界でも、お宮参りに似た宗教上の儀式がある。キリスト教では洗礼(Baptism)を行う。洗礼も神の子となり、その地域の教会の一員となる儀式である。さっそく数日後の朝礼の時に、皆に説明した。因みに、洗礼について宗教学者のひろさちやさんは、次のように述べている。

『キリスト教では、教会の一員となるには洗礼を受けなければなりません。洗礼は「バプテスマ」といい、罪人が罪を悔い改めて、キリストによる罪の許しを与えられ、新しく生まれかわって教会の一員となる礼典です。カトリック教会では、この洗礼の際に、代父あるいは代母を立てて、聖人の名を霊名(洗礼名)としていただく習慣があります。これは、その名をいただいた聖人の徳行にならおうとするものです。なお、プロテスタントのほうでは、みずから信仰告白をすることができない幼児への洗礼を、有効としない傾向が強いようです。また霊名(洗礼名)をつける習慣もありません』

となり、カトリックとプロテスタントでは、洗礼に対する考え方も違う。

### 《七五三》

イギリス人 CA を担任する前は、ブラジル人 CA を受け持っていた。訓練は11月から始まったので、都内見物で明治神宮に行ったときは、ちょうど七五三の時期だった。着飾った男の子や女の子たちが親に連れられてお参りにきていた。

「着物を着た子供達がいっぱいいます。何をしていますのですか?」

「あれは、子供がすくすく育っていることを、土地の神様に感謝するために、お参りにきている人たちだよ」

「街では、子供は着物を着ていません。どうして着物を着ているのですか?」

「むかし、子供は3才になると、髪をのばして結ぶ儀式をしたんだ。そして、5才になると、男の子は女の子と違う着物を着はじめたんだ。女の子は、7才になると、子供用の着物を着るのをやめる。男の子も女の子も、7才になると、正式に土地の住民として認められ、大人の仲間に入れてもらえたんだ。昔のお祝いの風習が、今も残っているん



だよ」

「よく見てごらん、お参りに来ているのは、男の子は 3 才と 5 才の子供だけなんだ。女の子は 3 才と 7 才の子どもしかいない筈だよ」

初宮参りは、子供がこれからすくすく育つように、そして、七五三は、こどもがすくすく育ったことを感謝し、これからも丈夫に育っていくように、土地の氏神様にお願いに来る風習であり、今も続いている。

### 《イギリス的カンニング防止》

ロンドンで習った課目のテストが、東京訓練の第 2 週から始まった。月曜日の 1 時限目に、テスト用紙を抱えて教室に入り、これからテストを行うと伝えた。するとイギリス人 CA たちは、イスを机の外側に出し、机の端と端にお互いが向かい合うように座ろうとした。彼女たちはいろいろな地方から集まってきた。その彼女たちが、こちらから指示したわけでもないのに、テスト時の着席スタイルをとった。ということは、イギリスではテストを受けるとき、生徒がお互いカンニングをしないよう向かい合って座ることになっているらしい。昔、イギリス映画で "カンニング" というのがあった。映画化されるくらいだから、カンニングが盛んだったのかもしれない。そして、その防止策として、このような着席スタイルが確立されたようだ。

### 《アジア的カンニング》

カンニングは、私も学生時代にやった思い出がある。テストの監督をして分かったことは、中国系訓練生もヨーロッパ系訓練生も、日本人訓練生がおこなっている程度のカンニングはしていた。もちろん全員ではないが……。

ここでちょっと、ある実験をした。テスト中に、所用があるふりをして教室から出て、ビューア越しに、教室内のようすをそっと 2、3 分覗いてみることにした。テストの監視役が居なくなった時の反応が、それぞれ違っていたのは興味深い。中国系の CA たちは、筆者が教室を出ていきなり、情報交換会になった。教室のあちこちから声が上がり、この問題の英語の意味はああだ、こうだ、そして、答えはこれでいいのよね、と声が外まで聞こえてきた。皆があまりに情報交換に熱中しているので、教室に入っていきのちに気後れしてしまったくらいだ。しかたなく、「これから入るゾ」とドアの把手をゴソゴソさせてから教室に入っていった。このクラスからは、「いい教官」という評価をもらい、その後、このクラスの

授業にいくと、ミスター・K がきた、と喜んでくれ、授業もよく聞いてくれたというオマケもあった。

イギリス人 CA のクラスでは、中国系 CA より、平均年齢が 2 ~ 3 才上であったこともあるが、その反応は、少し違っていた。意外と静かなのである。せいぜい隣同士で小さな声で話している程度だった。

実は、邦人 CA にも、同じ実験をしたことがある。その反応は、中国系 CA とイギリス人 CA との中間というところである。日本の学生の実態は、皆さんの方がよく知っていると思う。

### 《シンガポール人 CA》

前項で中国系 CA と表現したが、今回採用したシンガポール人 CA は、国籍はシンガポールだが、中国人を祖先に持っている人たちばかりである。シンガポールの人口構成は、中国系が約 80%、マレー系が 15%、インド・パキスタン系が 5% 前後となっている。構成比率的には、中国系の人たちが絶対的に多い国なのだ。中国系シンガポール人を採用したのは、将来、彼女たちに太平洋線を乗務してもらうためなのだ。太平洋線には中国系の旅客が多数搭乗してくる。中国系シンガポール人であれば、香港基地 CA 同様、英語を話さない中国人旅客にも対応できる。各国航空会社がシンガポール人 CA の獲得を積極的に行っている。各航空会社にとっては、シンガポールは賃金が比較的安く、人件費をセーブできるというメリットがある。さらに、シンガポール人は、他のアジア諸国と違い、日常生活の中で英語を使っている唯一の国であることも大きな理由になっている。

### 《テスト結果発表》

採点済み答案用紙返却のときの反応が、日本人とイギリス人では違う。特に、自分の点数が悪かったときの反応が違う。日本人は、あまり勉強もしなかったし、しょうがないかと頭をかきながら席に戻っていく。そこには恥の表情がある。

イギリス人 CA たちは、自分に対して不満である、というような表情を見せる。結果が悪ければ意味がない、という考えのようだ。そして、まじめな娘は、かならずどこを間違えたのかを確認していた。自分が勘違いしていた項目を、2 度と間違えないようにするためだ。

野球選手が、打球を取り損ねたときの反応を思い出す。

日本の選手は恥ずかしいという態度をとるが、アメリカの選手は、地団駄を踏んで、くやしいという態度をとる。どこかそれに似ている。

日本では、結果のみならず経過（努力）も評価する傾向にある。一方、契約社会である欧米では、結果を重視する。そのことが、テスト結果発表時の反応のちがいに現れている。中国系のCAたちは、どちらかという日本人に似た反応を示した。

### 《一生懸命》

「いっしょうけんめい」という熟語は、昔は、「一所懸命」と書いていた。「ひとつの所で命を懸ける」が本来の意味だそう。

担任教官が、訓練生を評価するとき、テスト結果だけではなく、訓練への取組み姿勢や態度なども加味する。結果も大事だが、日本では、訓練中の前向きな態度とか、やる気とか、途中経過も重視する。

むかし「スチュワーズ物語」というテレビドラマがあった。視聴率も高く、CAに憧れる若い女性のみならずサラリーマン達でさえ、放映日の翌日は職場の話題にしたほどだった。「スチュワーズ物語」というのは、ドジでのろまなCA訓練生が、一生懸命ひたむきに努力して、訓練を無事終了しCAになるという話である。これだけではドラマにならないので、このひたむきな訓練生が、教官に恋焦がれるという物語だ。このドラマが評判を呼んだのは、CAの世界がテーマであったことや、人気俳優が出演していたこともあったが、日本人の好きな「一生懸命さ」や「ひたむきさ」が描かれていたところにあったと思う。

日本人から見ると、外国選手はあまり練習をしないので、たるんでいるように見える。そして、結果で勝負する外国人選手と、途中経過を重視する監督との間に、価値観の相違から摩擦が起きることがある。

イギリス人CAが、日本人社会のなかで、理解できずに苦労したことのひとつに、この一生懸命やひたむきな態度がある。訓練中もそうだったが、一人前のCAになって、邦人CAの中で働くようになった後も、この問題にぶつかった。日本人が持っているこの価値観と、彼女たちが持っている価値観が違うため、邦人CAとの間で軋轢も起きた。

邦人CAの間では、新人は新人らしく、言われたとおりの一生懸命にやればよいのだ、という価値観が面々と脈打って

いる。

一方、イギリス人は、ものごとを合理的に考えるところがある。新人といえども、一人前のCAになった以上、自分で考えて、これが最上のやり方だと思ったら、そのやり方で行おうとするし、先輩に対しても意見を述べる。

邦人CAから見ると、これがおもしろくないのだ。「新人のくせに」ということになる。日本では、男性よりも女性社会の方が、先輩後輩の関係は厳しい。CAの世界も女性社会である。

邦人CAと一緒に仕事をしていくうちに、イギリス人CAたちも、邦人CAへの接し方のコツが分かってきて、今では、余計なことを言わずに、ひたむきに働いている姿が機内で見られる。この問題で苦労したイギリス人の先輩達が、後輩達に日本人社会の中で働くコツを教えている。

### 《日本人的イギリス人》

筆者が教えたイギリス人CAたちは、日本人の中で仕事をした経験などまったくない人たちばかりだった。日本人との付き合い方は何も知らない。教える側の教官たちも、機内での仕事のやり方を教えるので精一杯だった。外国人が日本の会社でうまくやっていくには、どのようにすればよいのか、というノウハウの蓄積がない。訓練の大半は、東京で行われる。授業方式は日本の学校スタイルで実施したが、教室の中はイギリスそのものである。1人の日本人教官と16名のイギリス人CAたちである。多勢に無勢となる。

彼女たちは、自分の意見を人前で話せないのは恥ずかしいことと教育されてきている。授業中も授業以外のときも、よく質問をしてきたし、自分の意見も述べた。教官が聞いた仕事の仕方も、もっと合理的な方法があれば提言もした。ときには、「そんなやり方はおかしい」と感情的な態度をとったこともあった。そこにいたのは、日本人社会の体験がない生のイギリス人やアイルランド人だった。日本人社会で味わった苦い経験も、先輩からのアドバイスもない人達だった。

今では、イギリス人CAたちは、日本人の仲間とうまくやっている。ロンドン基地CAの教育を担当した者としては、うれしい反面、なにかイギリスらしさがなくなってしまったような感じがする。彼女たちにとってみれば、自分たちの行動基準で仕事をすれば、仕事に影響があるし、下手すれば、生活がかかってしまうというのが本音だろう。

## 《救難訓練》

訓練のはじめに、教官が、今日は誰がCA役を行うのかを聞く。このとき、私がやってもいいと手を挙げるのは、ヨーロッパ系のCAたちに多い。日本人は、このような場合あまり積極的ではない。教官に言われるまで、CA役が自分に当たらなければいいのと思っている。中には、積極的に手を挙げる訓練生もいるが…。

ヨーロッパ系CAたちは、今はうまくできないかもしれないが、緊急事態のときはチャットできるようになりたいので私にやらせてください、と手を挙げる。そして、うまくできなくても誰も笑ったりしない。

恥の文化をもつ日本人は、そのような時、皆の前でちゃんとしてできないと恥ずかしい、という感情が先にたってしまう。また、へたに手を挙げると、あいつ教官に気に入られたいんだらうという、目に見えない牽制球も飛んでくる。現役 CA たちも毎年救難訓練を受ける。日頃から「安全」を口にする人は多いが、やはり、積極的に CA 役をする人は少ない。

《水と安全はタダではない》という言葉があるように、イギリス人 CA たちも、安全に関することについては、実に真剣に取り組む。特に、自分の身の安全は自分で守るという考えが根づいている。

## 《会話が静か》

欧米人はとにかくよくお喋りする。イギリス人やブラジル人だけではなく、ドイツ人もよくしゃべる。授業合間の 10 分間の休憩時間でさえ、何人かごとの輪ができて会話が始まる。沈黙が苦手らしく、一度会話が始まると、だれかが喋っている。若い女性たちばかりなので、話している内容は、ボーイフレンドのこと、家族のこと、郷里のこと、住居のことなどで、日本の若い女性とあまり変わらない。

しかし、話し方は違う。クラスのイギリス人は 20 代前半の女性たちだったが、日本の若い娘たちのワイワイといった話し方ではなく、物静かな話し方をする。紅茶を手を持ち、静かにおしゃべりをするのが、彼女たち特有のスタイルだ。日本の若い女性(若くない女性もそうだが)は、話中に夢中になって、だんだん声が高くなり、まわりの人たちが迷惑に思っているのも分からなくなってしまうことがある。イギリス人たちのお喋りは、近くで聞いていてもあまり気にならない。

## 《会話が発展》

彼女たちは、こちらが一言喋ると、三言は返してくる。三言の中には、新たなピクが入ってくるので、話がどんどん展開していく。

筆者が教官時代に、邦人 CA 採用面接で、外国人英語教官とペアになり英語の面接官をしたことがある。英語でのやりとりそのものは、外国人教官が主に行う。筆者はそれを聞き、応募者の英語レベルを見るのが仕事だった。

外国人教官 「Where are you from?」

応募者 「I'm from Saitama...」

外国人教官 「…」

大半の応募者は、外国人教官の質問に対し、「埼玉からきました」とだけしか答えない。答えとしては間違っている訳ではないが、欧米人と会話をする時には、これでは、なにか足りない。欧米人であれば、同じ質問に対して、少なくとも 3 倍の答えをする。自分の出身地の名前だけではなく、「それはどこにあるのか」「どのくらい遠いのか」「どのようなところか」まで説明する。場合によっては、「そこには結婚した兄と両親が住んでいる」とか「両親はそこで商売をしている」とかも話す。欧米社会では、表現しなければ相手に通じない、という考えが一般的である。日本人が得意とする、「以心伝心」は通用しない。自分の思いや考えを言葉にして初めて、他人に理解してもらえると考えている。

これも、欧米の歴史や文化的背景からきている。ヨーロッパ人は、今のドイツあたりを中心に活動していたゲルマン人、イギリスはケルト人、フランスのゴール人、そして、ローマ人、キリヤ人が交わって生活してきた。同じキリスト教でも、カトリック教徒とプロテスタント教徒では考え方が違う。

これら多民族が、平和に暮らしていくためには、お互いの価値観や違いを知り、認め合わなければならない。そのためには話し合わなければならない。より自分たちのことを知ってもらう努力が必要であった。—自分を知ってもらう—欧米人の会話の基本がここにある。

日本人は同一民族であり、宗教的にも、自然環境的にも、歴史の中で培われてきたお互いの価値観は同じといってよい。そのため、お互い言葉に出す必要があまりなかった。

この背景が、欧米人と日本人の喋る量の違いに現れている。日本人が、異民族(特に欧米人)と付き合っていかななくてはならない現代は、「言わなくても分かるだろう」の考え

はあきらめたほうがよい。

### 《アイステイ》 Iced Tea

日本人がお茶に愛着を持っているように、イギリス人も紅茶をこよなく愛している。

昼休みに喫茶室で、みんなでお茶でも飲もうということになった。彼女たちは温かいものを飲むときは、やはり紅茶だ。コーヒーを飲むより紅茶を飲む方が多い。冷たいものを注文する時は、糖分の少ないものを飲んでいる。筆者は、アイステイが好きなので、冬でもアイステイを飲む。それを見た1人が、

「Iced Tea を飲んでいるのですか」

「そうだよ。なにか変か」

「Tea に氷を入れるなんて考えられません」

「Iced Tea が好きな日本人はけっこういるよ。特に暑いときの Iced Tea はおいしいよ。東南アジアの国でも、Iced Tea はポピュラーな飲物なのだよ」

と説明しても、なにか納得ができないうらしく、そんな飲み方は邪道だというような顔をしていた。

確かに、イギリス滞在中にアイステイを注文したことはない。注文すれば提供してくれるとは思いますが、イギリスでアイステイを飲みたいとも思わない。アイステイは、むしろ暑い国で飲むとおいしい。その点、イギリスは夏でもあまりむし暑くはないし、暑い時期も短い。

### 《ミルクが先か後か》

飛行機は、空気の薄いところを飛行する。そのため、飛行中の機内は 0.8 気圧に与圧されている。与圧された機内でお湯を沸かすと、摂氏 80 度で沸騰してしまう。機内のお湯の温度は日本茶にはよいが、100°C で沸騰したお湯を使う紅茶には向いていない。機内で紅茶を作ってもなかなかよい香りが出ない。

授業のとき、紅茶についての論議になった。彼女たちが紅茶を飲むとき、たいいていミルクを入れる。イギリス人は、紅茶はミルクを入れて飲むものと思っているようだ。見ていると、ミルクを先に入れ、そこに紅茶を注ぐことの方が多。そこで質問して、お互いに議論をさせた。

「イギリスでは紅茶を飲むとき、ミルクを先に入れるのか、後に入れるのか？」

3 分の 2 の人たちは、いつもミルクを先に入れて飲むと言っ

ている。残りの 3 分の 1 の人は特に意識をしていないらしく、どちらでも良いと思っている、という意見だった。次に、

「ミルクを先に入れるのはなぜか」

という議論をさせた。ミルクを先に入れて飲む人たちの間で意見が一致したのは、

—ミルクを先に入ると、

紅茶の渋がカップに付着しないで済む—

というものだった。次に、

「なぜ、紅茶にミルクを入れるのか」

と質問をした。

「紅茶の渋みとミルクのマイルドさがよく合います」

「紅茶は、沸騰させたお湯を使います。熱いのでミルクを入れると飲みやすい温度になります」

「いつも家ではそのように飲んできたから」

という答えだった。

「日本やアメリカでは紅茶にレモンを入れることがあるが、皆はレモンを入れないのか」

「イギリスではレモンを入れません!」

「紅茶にレモンを入れるなんてアメリカ人のすることです」

イギリス人は紅茶にレモンを入れない。イギリスでは、紅茶にはミルク、と決まっているらしい。それがイギリス人の紅茶へのこだわりとなっている。

### 《紅茶にレモン》

「タイタニック」(レオナルド・デカプリオ、ケイト・ウィンスレット主演)という映画があった。タイタニック号の処女航海 (Maiden Voyage) を最後に、引退することになっていた船長が、順調に航行している船のブリッジで紅茶をすすするシーンがあった。

タイタニック号は、当時、大英帝国が国の威信をかけて建造した世界最大の豪華客船だった。この客船はイギリス船籍であり、船長もイギリス人であった筈である。ところが、このシーンの船長の紅茶には、なんとレモンが入っていた。イギリス人の船長をイメージしていたので、「えっ、この船長はアメリカ人の!」と訝しく感じた。知り合いのイギリス人 CA のベテランに、この話題を出したら、

「しょうがないですよ、だって、あれはアメリカ人がつくった映画ですから・・・」

と言っていた。



## 肉はよく焼いて

当時は、機内ファーストクラスで、ロースビーフがサービスされていたので、そのサービス方法も教えていた。イギリスはロースビーフの本場なので、イギリス人も生焼きが好きだろうと想像していた。お客役の訓練生に、機内と同じように注文をとった。どの訓練生もウェルダンにして欲しいと注文してきた。エーと思い、みんなに聞くと、彼女たちは生焼きが食べられないと言う。エリザベス女王も、肉はウェルダンが好みだそう。そういえば、ロンドンでロースビーフを食べに行くと、レア（Rare）を注文したのに、焼けすぎのものが出来たのでがっかりしたのを思い出す。牛肉をよく焼いてしまうなんて、本当にもったいない話だ。

## 《ワタシハ鼻デス》

医学関係など特殊な科目以外は、担任がほとんどの授業を受け持つが、時には他の教官にお願いすることもある。他の教官が教室にいくと、名前や職位や乗務歴など自己紹介してから授業に入る。

このときの自己紹介が、イギリス人 CA にとっては、おかしくてしょうがないらしい。教官が、「私の名前は…です」という時、かならず鼻を指す。それがおかしくてしょうがないのだが、笑ったら失礼にあたると思い、笑いをこらえるのに一生懸命だったという。

欧米人が自己紹介する時は、胸に手をあてる。もっと強調したいときは、親指を立て、その先で胸を指す。いずれの動作も胸すなわち心（ハート）を指している。私はこういう心の持ち主です。つまり外見ではなく内面を知ってほしいと表現している。そこには、個人の人格を尊重する社会背景が感じとれる。

宮城教育大学で英語学教授をしていたリジー・プロブナハ教授によると、日本人は個人としての自己よりも、集団の一員としての自己を、英語国民より強く感じているようだ。英語では、「私は田舎の出身です」「私は大家族の出です」と自分個人を主語にして言うところを、日本語では「私の故郷は田舎町だ」「私の家族は多い」のように言う。「私」が主語にならないことが多いそうだ。

自己紹介をするときに鼻をさすのは、私は訓練部という組織の一員です、教官にもいろいろな人がいるが、私はこういう顔をしているから覚えておいてね、と言っていることになる。

鼻をさす動作と親指を胸にあてる動作の違いについて、荒木博之氏は次のように書いている。

『日本は「引きの文化」であり、欧米は「押しの文化」である。

例えば、ノックリは、日本では引いて使うが、欧米では押して使う。柔道も、常に後ろへ、後ろへと引きながら勝機を伺う。日本人は、「受け身」的な行動をとることが多いそうだ。人指し指で反らしながら、「この俺だよ」という姿は後ずさりの姿が似つかわしいが、親指で胸をさすしぐさはどうしても前進の姿がサマになる。鼻を指す姿は、へっぴり腰になじむ動作だが、親指で胸をさす姿勢はどうしてもへっぴり腰にはなれない姿なのである』

## 《肩書社会》

欧米人が上司を呼ぶとき、肩書で呼ぶことはほとんどない。邦人 CA は「教官」とか「課長」と肩書を呼ぶが、筆者の教え子たちは、「ミスター・〇〇」と上司を個人名で呼んでいた。上司がファーストネームで呼んでも構わないと言うと、上司のことでさえファーストネームで呼ぶことはすでに紹介した。

彼女たちは肩書に対してではなく、その個人が尊敬に値するか、能力があるかに重点をおく。課長は課長の職務を、部長は部長の職務を遂行する人であり、肩書があるから偉いとは思わない。肩書のある人は、常に正しいことを言うとも思っていない。人間である以上、間違いを犯すこともあると考えている。同時に肩書があろうがなかろうが、人間としては平等に扱われるべきだと信じている。たて社会に慣れた日本の会社が、ヨコ社会で育ってきた欧米人を雇用し働いてもらうのであれば、肩書に頼らず、実力で勝負する必要がある。

## 《ディスカッション》

日本人がもっとも苦手とするものに、「議論」がある。彼女たちが日本の企業に勤めるようになって、最初にぶち当たったのがこれだった。上司の考えに対して、変だなと感じたり、おかしいと思ったら、質問したり、反論したりしてくる。また反論することで自分の考えを知ってもらおうとする。

教官に対しても、同じような態度をししばとった。ほとんどの教官は、授業を素直に聞いている邦人 CA を相手にしてきている。訓練生から反論されることながった教官たちの中には、最初のこと、イギリス人 CA の反論に、「訓練生のくせに生意気だ!」と思う者もいた。

外国人を教えるようになって、教官側もずいぶん変わってきた。議論に耐えられる人が増えた。「耐えられる」とあえて書いたが、邦人 CA だけを教えていた時代、教官は、自分の知らないことを質問されると、「訓練生はそんなこと知らなくていい」で押し通すことができた。自分が機内で行っていた「作業」を教えているだけで、「教官はすごい」と言ってくれた。

今、教官たちは、機内サービスという業務を、「これはこのようにするの」と教えるだけでは済まなくなっている。つまりノウハウ(Know How)を教えるだけではなく、ノウホイ(Know Why)を教える必要が出てきている。教官自身が体験してきたことに、理論的裏付けを加えて教えないと、訓練生から尊敬は得られない。特に外国人を教えるときには、論理的話し方が必要となる。日本の若い女性も、最近はキャリア志向が強まってきている。口にこそ出さないが、心の中で「どうしてなのか」と思っている。CA の世界でも、「経験重視」を主張する声があるが、「体験」と「経験」を混同している人が多い。「体験」に理論的裏付けを加えてはじめて「経験」となる。

外国人 CA 訓練で、何が教官たちを悩ませたかというところ、授業中説明していると必ずくる「Why」という質問だ。ところが、私たちの職場でも、あいまいにしたまま仕事をしていることがけっこうある。違う価値観の外国人 CA に質問されても、「今までの習慣でこうやってきている」とだけしか答えられないことがしばしばあった。

## 《WHY》

先輩 CA は、新人 CA の仕事を見て、「なんでそんなことするの」とよく言う。その次に来る言葉は、「バカじゃないの」となる。

日本人が "Why" という疑問文を使うとき、相手をバカにしたひびきを伴うことがある。したがって、日本では "Why" ということばを使うとき注意しなければならない。イギリス人を訓練している間、この "Why" を数えきれないくらい聞かされた。彼女たちが "Why" と聞くのは、そのことを十分理解するためなのだ。その背景には、自分で判断し行動するという、自立心が働いている。自分で判断するために、ちゃんと理由を知りたいと思っている。CA として飛び始めた後も、たとえ経験が浅くとも、一人前の CA としてサービスしたいと考えている。加えて、欧米の契約社会では、甘え

の構造はない。給料に見合った仕事ができなければ、即、雇用契約打ち切りにも遇う。ものごとを十分理解し、自立した仕事ができるようになるために、"Why" という質問をしてくる。欧米人に、"Why" と言われても、日本人の感覚で受け取らないことが大切だ。単に疑問に思うから "Why" と聞いているだけなのだ。

## 《がんばるって》

「がんばる」「努力する」「一所懸命」(一生懸命)などは日本人が好きな言葉であり、人々の行動規範になっている。「一所懸命」のように、命を懸けて仕事をするには、辛抱が必要だし、努力も必要となる。また、「がんばる」も、忍耐と努力が根底をなしている。

「がんばる」という言葉は、英語に訳しにくい言葉だ。あえて訳するならば、

"To make efforts continuously

with patience"

となる。言い方を変えれば、ものごとをすぐに「あきらめない」ということだろう。何かの試合や試験を受ける人に対しての「がんばって」は、あえて英語でいうならば "Don't give up!" であるが、欧米人は "Good luck" という。

欧米社会は、結果重視の社会であることは前にも触れた。これに対して、日本は仕事に対する取組姿勢とか態度をも重視する社会である。日本人は、「ひたむきさ」という言葉も好きだ。努力しつづければ穂も実ると考えている。農耕民族は、種を蒔き、草むしりをしたり、肥やしをまいたりして、じっと待っていると実がなる。それを刈り取る。狩猟民族は、努力をしても獲物にありつけないことがある。獲物にありつけないと餓死することになる。大切なことは、獲物がある場所を早く見つけ、見つけたら獲物と戦い倒さなければならない。農耕民族のようにじっとしている訳にはいかない。したがって「ひたむきさ」的な発想を、英語にして説明するのは苦勞する。結果がよければ良いのである。

日本人のスポーツに対する態度を見てみると、型にこだわる人が多い。ゴルフにしてもホーリングにしても、野球のバッターにしてもそうだ。電車を待っている間に、クラブ代わりに傘を振っている人を見かける。自分のフォームが気になるらしい。一方、欧米人は自分に合ったフォームで球を打ったり、投げたりする。

機内の作業でも、邦人 CA たちは、いままで先輩たちが

培ってきたやり方を踏襲しようとする。また、そのようにやらなければ先輩たちに嫌われる。イギリス人 CA が乗務し始めたころ、日本人の先輩 CA が、仕事が始まる前から、あしろとか、こうしろとかやり方を言ってくるのに、自立心の強い彼女たちは閉口していた。よい意味で親切、悪い意味でお世話または過保護が、日本人の特徴と言える。

外国の航空会社では、先輩 CA は新人 CA に対してあれこれ言わない。言うのは、新人 CA がチャットした仕事ができなかった時だけである。そのときはアドバイスなり指導が行われる。

稲を実らせるには順序がある。田んぼを耕し、早苗を植え、草むしりをし、肥料をやるなど、それぞれの時期にしなければならないことが決まっている。毎年同じことを繰り返している。そして、子は親の真似をしながら田植えを覚えていく。順番を間違えたり、時期を間違えたりしてはいけない、と日本人は習ってきた。

### 《男と女のために》

訓練も 2 週間目に入ると、別のフラストレーションが出てきた。訓練そのもので、ストレスがたまってきたので、当時流行っていたディスクに連れていった。ストレスだけではなく、フラストもたまっているらしい。彼女たちはすでにボーイフレンドと 2 週間も会っていない。皆が皆にボーイフレンドがいるわけではないが、故郷にボーイフレンドを残してきた CA たちは、寂しくしょうがないらしい。寂しいというより欲求不満になっているらしい。日本人女性が海外に留学して、彼氏としばらく会えなくなっても、会いたいという気持ちはつるかもしれないが、会いたい＝愛し合いたい、とはならない。精神的な愛と肉体的な愛がかならずしも一致しているわけではない。

イギリス娘たちは違っていた。「会いたい＝愛し合いたい」になるのだ。それを口に出して言う。「2 週間も彼と会わないなんて考えられない」と、担任にまで言う。

キリスト教は、別名「嫉妬の神」とも言われている。欧米人の男女が、いつも「愛している」と口に出しているのは、常に嫉妬心が背景にあるという説がある。結婚後も、愛の確認作業が必要なのだ。口に出して言うだけでなく、態度で示さなくてはならない。欧米人のビジネスマンが転職になると、かならず奥さんを連れていく。日本では、子供たちの教育のためとか、家族が外国生活するのは無理などという理由で、夫だけが赴任していくケースがある。長い間、愛し

合うことがなくても、日本では夫婦関係は悪くはならない。

単身赴任は、欧米では考えられない。夜の夫婦生活がなければ離婚の正当な理由となる社会なのだ。たとえば、夫が出張して、奥さんが我慢できる限度は 1 週間かもしれない。長くて 2 週間である。それ以上になると、奥さんも一緒についていく。出張に出す企業の方も、奥さんが一緒にいくのは当然だと思っている。

### 《ボーイフレンド》

欧米社会で使う単語"Boy Friend"は、カタカナの「ボーイフレンド」とは、意味するところがやや違う。彼女たちが、「私の Boy friend の何々は・・・」というとき、性的関係にある男友達のことを意味していることが多い。性的関係のない男友達は、ただの"Friend"となる。

邦人 CA に、「ボーイフレンドはいるの」と聞かれたとき、彼女たちは、ボーイフレンドのイメージを、男女の結合と結び付けてとらえる。だから、ボーイフレンドがいるかどうかという質問は、プライバシーに関わることになる。質問している邦人 CA のほうは、まだフラットな段階の相手でも、「ボーイフレンド」と呼ぶ。そして、その感覚で質問する。また、邦人 CA たちが、「私のボーイフレンドは」と言えば、聞いている方のイギリス人 CA は、「彼とは親密な関係」と理解する。"Boy Friend"は、男女関係において、日本人が使っているほど軽い関係ではない。

そのボーイフレンドと、2 週間も愛し合っていない。大人の女の自然な欲求が満たされていない。しかも、彼女たちの感覚では、いい年をした男が 2 週間も自分なしではいられない筈だと思っている。もしかしたら・・・と心配なのだ。このような心理状態が続き、フラストレーションとなってきた。

### 《同棲生活》

彼女たちと話していて分かったことだが、クラスの 3 分の 2 は同棲生活を送っていた。イギリスには、日本のようなワンルームマンションと呼ばれるアパートはほとんどない。イギリスで「マンション (Mansion)」と言えば、豪邸や館をさす。日本でいうマンションのことを「フラット (Flat)」と呼んでいる。これらのフラットは、最低でもベッドルームが 2 つに、リビングルーム、キッチンそしてバスルームがついている。広さは日本の 2DK の 1.5 倍から 2 倍になる。これらのフラットは、1 人で住むには広すぎるし、家賃も高い。そのため、友達とシェア (Share) して負担を軽く

する。ホーイフレッドがいる人は、ホーイフレッドと一緒に住む。その方が、何かと便利で一石二鳥なのだ。女性同士でシェアしている娘もいる。女友達同士だと親も心配しないらしい。Shareした方が、税法上もメリットがあるとも話していた。

### 《親から独立》

イギリスを含めた欧米社会では、子供は一定の年齢になると、はやく親から独立しようとする。イギリス人でも、早い人は、義務教育(16才修了)が終わると同時に社会に出て、親から独立する。親も子供の自立心を養うような育て方をしている。裕福な家でも同じだ。子供の方も親に頼らず、自立しようと努力する。日本の親は、長男が誕生すると、世継ぎができた王子様扱いして、手取り足取り大切にしようとする。最近では、男の子に代わって女の子の方が大切にされ、いつまでも親がかりの状態が続いている。子供に対する親の態度は、日本とイギリスではかなり違う。

イギリスも、家父長制の国であり、家父長中心の家族制度が長く続いていた。昔は子供たちのうち、長男のみがその家の財産を継承し、次男以下や娘達は外に出された。長男とそれ以外の子供たちでは、まったく違う待遇を受けた。極端な時には、長男が一家の長になると、同じ兄弟でも、次男以下は下男同様の扱いをされた。そのため次男以下は、それが嫌で家を出たとも言われている。

このような歴史的背景もあり、子供は早く親から独立しようと努力する。なぜ親から独立したがるのか、イギリス人 CA に聞いたことがある。

「自由に生活できるから」

「親から開放されるから」

というのが本音らしい。自立心もさることながら「自由さ」を求めている。

イギリス人の場合、若くして社会に出る人が多いが、10代で社会に出ても仕事のキャリアがないため、それほど十分な給料をもらえない。1人で生活するには、彼らの給料では足りない。このような時、日本の若者であれば、親のスネをかじる方をとる。イギリスの若者は「自由さ」の方を選択する。何とか人並みの生活をするために、若者同士で協力し、住居費を安くすませようとする。同性や異性と部屋を共同で借りるのは、このような背景がある。

### 《自己責任》

社会人教育の一環として、邦人 CA のたまご達に、「皆さんは、自分は大人だと思いますか」という問いかけをした。大人と子供の違いは、自分がとった行動に対して責任がとれるかどうかだ。親にトラブルの処理を頼んでいるようでは、20才をすぎても大人ではない。

自分の人生は、自分で責任をとらなければならない。40才や50才になって悔やんでも青春は帰ってこない。

イギリスの若者たちは、「自由さ」の方を選ぶことが多い。「自由さ」という自立心には、かならず「責任」が伴う。自由であると同時に、ものごとは自分で決めなくてはならない。

そして、責任も自分でとらなくてはならない。このことは男女間の問題についてもいえる。彼女たちに、

「いまのホーイフレッドと結婚するつもりなのか」

と聞くと、

「分からない」

という返事が帰ってくる人が多い。続いて

「今は、彼を一番愛している」

と言う。さらに話をしていくと、愛している彼氏がいるにもかかわらず、もしかしたら、もっと自分に合った男性がいるかもしれないとも思っている。もしそのような男性が現れれば、その男性とも身をもって付き合うこともする。お互いの人生観や価値観が合っているか、というような精神的なことだけではなく、性的にも合っているかどうか重要視しているようだ。そして、自分が納得するまで、いろいろな男性と付き合う(もちろん中には慎重な行動をとる娘もいる)。そのためか、彼女たちの行動はかなり積極的に見える。青春を謳歌しながら、将来の伴侶を見つけているようだ。最近の日本の若い女性を見ていると、ずいぶん欧米型になったと感じるこの頃である。

### 《イギリス人とドイツ人》

私たち日本人は、イギリス人もドイツ人も同じヨーロッパ人であり、いろいろな面で似ているだろう、と考えがちだ。ところが、イギリス人とドイツ人では、異文化に対する姿勢がずいぶん違うことが分かった。

イギリスは大英帝国を築くために、世界の海を制覇してきた。自国だけにとどまらずに海外に出ていった。そして、植民地を作り、貿易を発展させ英連邦を築き上げた。多くの国にイギリスの影響を残してきた。イギリス人は、植民地政策



を行うにあたって、その植民地の人たちの感情を大切にしました。その土地で育まれてきた文化を、始めから否定することはしなかった。

訓練中、イギリス人 CA は日本式のマナーや習慣について、ドイツ人より柔軟だったのも、異文化の国に進出していった伝統を引き継いでいる結果のようだ。最初は、相手の文化を尊重し行動するが、強制されたという感情を相手に感じさせずに、いつの間にか、イギリスの価値観を植えつけてしまう。だからこそ、いまでもイギリスの影響を残している国が多い。

授業の休み時間などに、彼女たちといろいろ話をするチャンスがあった。日本のことを話したり、イギリスのことを聞いた。話していて感じたのは、イギリス人は自分たちの文化を説明するのがうまい、という点だ。言葉にしてもそうなのだ。自分たちが使っている英語表現を、さりげなく異文化の人たちに説明する。あるとき、「オリーブ」のことが話題になった。すかさず、

「イギリスでも、同じような表現があるわよ。"Olive Oil"(オリーブ油) っていうのよ」

今度は反対に、こういうおもしろい言い方があるのよと紹介してくる。

「"831"ってどういう意味か知っていますか」

「…」

「"I love you"っていう意味なの。よく使う表現よ。8つの文字と3つの単語で1つの意味を表しているから831っていうの」

「それじゃ、"Smart upstairs"って知っている？」

「…」

「"アツマ(頭)いい!"っていう意味よ」

私たちが学校で習わなかった表現がポンポンでてる。イギリスの若い人たちが使う生の英語を教えてくれる。実践的な英語なので聞いている方もおもしろい。こんな表現をするのだ、と思いつつ覚えてしまう。

筆者もこういうのは嫌いではないので、テキストに出てこない日本語を教える。日本語テキストでは、「トイレはどこですか」を覚える。旅客は、かならずしも、「トイレ」を使うとはかぎらない。年配の人たちは、「御不浄」というかもしれないし、「便所」というかもしれない。機内では、男性旅客は "ベンジヨ" と言うことがある。それは "トイレ" のことだと教える。すかさず返してくる。

「それを英語では、ルー(Loo) と言います」

「ルーって、"Waterloo の戦い"の"Loo"のことかい？」

「そうです。"Loo"は「場所」のことを言います。だから私たちが使うときは "ある場所"って感じです」

その後、授業中に生理現象で耐えられなくなると、サッと手を上げ、

"May I go to the loo?"

と言ってきた。昔は上流階級の婦人たちが使っていた表現という説もある。現在では、くだけた言い方なので、仲間同士で使うのはよいが、時と場合によっては使わない方がよい表現だそうだ。イギリス英語独自の表現なのでアメリカ人には通じない。

イギリス人 CA たちと一緒にいると、ところどころでこのような話題になった。こちらの話も否定せずに素直に聞くが、話を発展させ、いつの間にか自分たちのやり方や文化を紹介している。大英帝国を築き上げるために、積極的に異文化の中に入り込み、異文化に柔軟に対応してきた祖先の血がいまでも若者の中に流れている。

### "Tolerant"

イギリス人の好きな言葉の1つに、タラント(Tolerant)という言葉がある。「我慢、忍耐、寛容」がその意味にあたる。異国の地に来て、見るもの、聞くものが初めてのことばかりの中で、実にタラントに行動してくれる点、イギリス人を担任した教官たちはずいぶん助けられた。忍耐が必要なときに、ユーモアで他人の心を和ませてくれるのも、イギリス人の得意とするところだ。

一方、ドイツ人は、訓練初期に起きた「お辞儀事件」のように、異文化に対してかたくななところがあった。自分たちが持っている価値観をなかなか変えようとはしないところがある。

海洋国家であるイギリスとは違い、大陸の中にあるドイツは、まわりの国を攻めたり、反対に攻められたりの歴史を繰り返してきた。攻めることもしたが、攻められて痛い思いも何度かしているので、異文化に対する恐怖心がある。ナチストドイツのユダヤ人虐殺がそのよい例だ。いつの間にか入り込んで、富を増やし、勢力をつけていったユダヤ人に対する民族的恐怖心が、当時のドイツ人を、軌道を逸脱した行動にさせたのではないかと考える。

ドイツ人にとって、異文化を受け入れることは、同時に、他

民族に征服されるのではないかという民族的恐怖心につながっていく。そのような危険がないと分かるまで、異文化や違う価値観を素直に受け入れられないような気がする。したがって、イギリスのような異文化の国へ積極的に進出していく植民地政策は、あまり得意ではなかったようだ。大陸民族と島国民族の違いがこのようなところにも現れている。

ドイツ人は気むずかしい、頑固、と感じるのはこのような背景がある。反面、恐怖心を取り除くと、最初は気むずかしかった彼らも、他文化の持つ価値観を素直に受け入れるようになる。その証拠に、最初のドイツ人 CA が飛びはじめて何年も経ち、今では、日本人乗務員とチームワークよく仕事をしている。むしろキツい仕事をやるドイツ人 CA は、邦人 CA の間でも評判がよいし、日本人旅客からのおほめの言葉も高い率となっている。

### 《食事だけはダメ》

異文化に対して柔軟に対応してくれたイギリス人 CA だったが、食べ物に関しては、弱音を吐いていた。寮の食堂も、社員食堂も、料理担当者は、ヨーロッパ人 CA が入社してくるので、料理の内容をずいぶん工夫してくれた。日本のおふくろの味が中心だったメニューに、洋風のものを加え、今までなかったパンやバターも置いてくれた。

安心食品ということばがある。これがあれば何とかなるとい食べ物という。人それぞれ安心食品を持っている。おふくろが作ってくれた、なつかしい味が安心食品の代表と言えるかもしれない。

人それぞれ安心食品を持っているが、それぞれの民族も安心食品や安心料理を持っている。日本人にとってみれば、「米」が代表的な安心食品になる。そして、味の面から言えば、かつお節などから作ったダシの味、いわゆる「うま味」が必要になる。ダシが効いていない味は、いま一つ物足りない。しょうゆも欠かせない。また、熱が出たりしたとき食べる「お粥」などもよい例だ。私たちは、体調がわるい時に、いくら美味しいからといっても、フランス料理を食べたいとは思わない。

イギリス人にとっての安心食品は、昔からあるミートパイ、ポリッジ(西洋粥)、ベーコン、マメ類、ポテト、プディング、チーズ、パンなどが代表的なものである。教え子たちは、「早く家に帰って、ヨークシャープディングが食べたい」というのが口癖になっていた。社員食堂のほうでも努力をしてくれたが、教え子たちが期

待する安心料理とは、ずいぶんかけ離れたものだった。最初の頃は、日本文化に少しでも触れようと、ラーメンを食べたり、焼き魚を食べたりした。それが、いつの間にか喫茶室でサンドイッチばかり食べるようになってしまった。特に、環境が変わり、訓練で疲れている身にとっては、身体を癒してくれるものを食べたくなる気持ちは、十分すぎるくらい分かる。

乗務で海外に滞在する邦人 CA も、体調の良いときは、その国の料理を食べに行く。ところが、時差や睡眠不足で疲れ気味のときは、日本食が食べたくなり、つい和食レストランに行ってしまう。そして、お寿司などを食べると力がついてきて、何となく安心する。国内では、ホーフレンドと洋食を食べに行く CA の中には、海外に出ると、とたんに和食党になってしまう人もいる。

異文化を受け入れることは、他民族から侵略されるのではないか、という民族的恐怖心を抱いているドイツ人であるが、食べ物に関しては、イギリス人に比べ柔軟であり、ラーメンはじめ、日本のものをよく食べていた。「ライスに醤油を少しかけるとおいしいのよ」と言って食べている。さらに、大豆は身体によいと教えると、大豆でできている豆腐なども積極的に試していた。食文化においても、イギリス人とドイツ人はずいぶん違っていることが分かった。

### 《チーズが好き》

ヨーロッパの人たちはチーズをよく食べる。イギリス人もチーズが好きである。何はなくともパンとチーズがあればなんとかなるらしい。日本人は、ご飯があれば何とかなのと同じようなものだ。宴席で酒を飲み交わした後、最後に腹をくちくするため、お茶漬けやツバを食べる。日本人はご飯かツバ類を食べて、初めて食事をした気になる。一方、西洋料理では、コースの後半にはかならずチーズが出てくる。ヨーロッパ人はチーズを食べて初めて食事をした気になる。ヨーロッパ人にとってチーズは、最もポピュラーな安心食品と言える。チーズには肝臓の働きを助けるメチオニン、胃壁を保護するタンパク質、脂肪分や酒の摂取による血液の酸性化を中和するカルシウム等が豊富に含まれている。身体にとってやさしい食べ物なのだ。

機内食事サービスでは、和風の食事と洋風の食事の選択となる。旅客の希望を聞きながらサービスしていくのだが、ときどき洋食ばかりが売れてしまうことがある。CA たちの食

事も、旅客と同じものが2種類あり、どちらかを選択して食べている。旅客からの洋食希望が殺到したときは、CA用に搭載されている洋食を旅客用に変更してサービスする。そんなときは、CA用の食事は和風だけになってしまう。邦人CAの場合は、和風しかなければいけないで、それをいただいている。ところが、平均的なイギリス人CAは和食が口に合わない。機内の和風料理は、ビジネスクラスでは会席風となっている。会席料理は、江戸時代に発達した、酒を楽しむための料理という要素が強い。てんぷらやスキヤキなど外国人にとって馴染みのある日本食とちがって、会席風は、馴染みがない料理ばかりである。努力してもちよっと…という感じなのだ。

彼女たちは、チーフパーサーのところに行き、和食が食べられないので、ファーストクラスで残ったチーズをくれないかとお願いする。チーズとパンをもらってきて食事の代わりにしていた。

#### 《教官は体調が悪いの》

訓練も3週間目に入ると実技課目が増えてくる。「知っているても、実践できなければ、

知らないのと同じである」

という標語が教室の壁に掛かっている。

ところが、訓練生は、教官の期待どおりに動いてくれない。実際の機内の忙しさを知らない訓練生には緊迫感がない。予習・復習が足りない。教室で習ったことをもう忘れている。卒業するまで時間も迫ってくる。この時期にハッパをかけないと、OJT(機上訓練)に出しても、現場から苦情がくる。邦人CAたちのときは、「君たちはやる気があるのか」とハッパをかけたり、ムツとした顔をしたりする。教官の表情を見て、訓練生は察しをつける。

ある担任が、自分のクラスの進捗状況が思わしくなく、機嫌がわるかった。そのため、実習中ずうっとムツとした顔をしていた。授業後に何かを言わなくてはいけない。「やる気があるのか」を英語で何と言えればいいのか、などと考えているとよけい無口になってしまう。そんな教官の態度や表情を見ていても、外国人CAたちは、このような時の日本人の思いを察することに慣れていない。「教官は体調でも悪いのかしら」くらいにしか受け取ってくれない。

彼女たちの社会では、上司は言い回しには気をつけるが、言いにくいことでもハッキリ口に出す。部下に嫌な顔をされようがお構いなしである。気持ちを伝えなければ、口に出す。

そのために、言葉があると考えている。

異文化の人たちと接する時、特に利害関係がある相手に対しては、よきにつけ悪しきにつけ、口に出すことが必要になってくる。例えば、訓練生に対して、

「I'm afraid you haven't done

your homework.」

(予習・復習をしていないな)

「I don't see you work hard.」

(もっとしっかりやってほしい)

というようにいう。

「NO という日本人」という言葉が一時流行った。というと、日本人はすぐ「NO」と言いはじめるところがあるが、これも注意が必要だ。「NO」とだけしか言わないのは、マナー違反になる。かならず「なぜ NOなのか」を説明しなければならない。

もうひとつ注意しなければならないのは、「NO」という時の英語表現である。イギリス人でもそれなりに教養のある人たちは、相手からの誘いや提供に対して、

「I'm afraid I can't visit your home

on that day」

「No, thank you.」

というように、NO という時にも"I'm afraid"や"Thank you"をつけて表現を和らげている。

#### 《教室が暑い》

冬の教室は、暖房が効いている。イギリス人CAたちは、授業中、上着を脱いでブラウス一枚になっている。教室が暑いらしい。全館で統一して暖房している。そのため各教室では温度調節ができない。暑いので、やむなくブラウス姿になっている。日本人とヨーロッパ人では、温度に対する感じ方も違う。日本人が心地よいと感じる温度は、欧米人にはやや暑く感じるようだ。欧米人は20度以下でも半袖姿でいることがある。日本人と欧米人の温度の好みについても授業で説明しておくことにした。

温度差については、いろいろな場面でその違いに出会う。最近、日本ではワインが流行っている。赤ワインは室温で、白ワインは冷やして飲む、と一般的に言われている。日本人にとっての室温と、欧米人(特にヨーロッパ人)にとっての室温が違う。日本人が好きな温度は摂氏23~24度である。冬の室内が22度以下になると、日本人は肌寒く感じる。10度

以下では服を着込んだ上にコタツが必要になってくる。一方、ヨーロッパ人にとっては、23～24度は暑いと感じる温度なのだ。ヨーロッパ人が好きな温度は、日本人より2、3度低くなる。

### 《居眠り》

授業をしていて感心したことの一つに、授業中に居眠りをする人がほとんどいなかったことだ。眠そうな顔をしているが、居眠りまでいかないのだ。邦人CAの居眠りに慣れている教官たちも、この点については異口同音に話していた。

昼食後の眠くなる午後には、実技訓練のように動きのある授業をするようにしている。といっても、すべてが実技授業とはいかない。座学の授業も入ってくる。この眠たい時間帯に、いかに居眠りをさせない授業をするかは、教官の腕のみせどころとなる。訓練生に居眠りされて怒っている教官がいるが、居眠りをさせるようでは、教官としてまだまだ半人前といえる。ただテキストに書いてあることだけを読み上げていたり、ワンパターンの話し方をしていたりすれば、訓練生だって眠くなる。

教官たちは英語で授業を行うことに慣れていない。時には、たどたどしい英語になることもある。込み入った内容のことを説明するときは特にそうだ。テキスト内容を解説するのがむずかしい時には、テキストにある英語の文章をただ読み上げてしまいがちになる。それでも居眠りをしない。もしかしたら、ペラペラの英語で授業をしないからよかったのかもしれない。あるとき教え子に聞いてみた。

「日本人は授業中に居眠りをするところがあるが、皆はあまり居眠りをしないね」

「私たちが眠く感じることがあります。しかし、私たちは給料をもらうために訓練を受けています。眠くても寝ないように努力するべきだと思います」

仕事をして給料をもらう人をプロフェッショナルというが、彼女たちはいろいろな仕事を経験してきているので、給料を貰うことの厳しさが身にしみついているようだ。居眠りをしないように、彼女たちなりに努力をしている。前にも書いたとおり、授業を一方通行にしないで、質問をしたり自分の意見を述べたりして、自分たちも授業に参加するようにしている。また、足を組んでリラックスした姿勢も、授業に集中できるように、居眠り防止に役立っていた。眠らないようにと、

教官の話を一所懸命聞こうとすると、かえって眠くなってしまふのかもしれない。

### 《うなずき》

イギリス人CAたちが飛びはじめて最初のころ、邦人CAとじっくり行かないことがたびたびあった。それは、価値観の違いだけではなく、振る舞いの違いにも、大いに原因があった。欧米人と日本人が話しているのを見ていると、日本人はうなずきながら相手の話を聞いている。日本人は自分が話しているとき、相手がうなずいてくれることを期待している。そして、相手が話しているときあいづちを打つ。うなずきは頭をたてに上下させる動作なのだが、欧米人は、この動作をあまり行わない。相手が話しているときは、相手の目を見ているのが普通だ。先輩CAたちが、新人のイギリス人CAに、いろいろ教えたりしても、彼女たちはうなずかない。先輩CAからみると、「この娘は素直ではない」となってしまう。

同じようなことが授業中にも起きた。教官たちは、生徒の反応から、理解できたかどうかようすを見ながら授業を進めていく。学生時代に教育実習の経験がある人は分かると思うが、教壇に立っていると、どの生徒がよく聞いているのか、クラス全体の反応はどうかよく分かる。そして、先生は、授業中の生徒のうなずき方で、生徒の理解度や反応を確認することがある。

教官たちの本職は、機内でのサービスであり、教壇で教える専門家ではない。たまたま教えることに向いているだろう、ということで教育の仕事に携わっているだけだ。学校の先生達のように教えるプロと違い、訓練生の反応が気になる。そのような時、授業中、うなずいてくれる訓練生がいると大いに助かる。飛行機や機内サービスについての授業は、入社まもない訓練生にとって、ときにチンパンカンパンになることがある。訓練生のうなずきがないと、教官は、自分の説明の仕方が悪いので、理解できなかったのかなと不安になる。

しかし、このうなずきは、どうも日本人特有のもののようにだ。特に日本女性は、目上の者が話している時にうなずく。邦人CAのたまご達も、授業中よくうなずいてくれた。邦人CAの授業に慣れてしまっていると、ヨーロッパ人CAがうなずかないので、最初のころ、授業の乗りがうまくいかないことがあった。



日本人はいろいろな場面で、実によくうなずく。企業の中でも、上司が何かいうと部下は「ハイ」と言うてうなずく。出発前ブリーフィング(打合せ)で、チーフパーサーが、当日のフライトについての諸注意を話していると、CA たちはうなずいて聞いている。お辞儀のしぐさとも関係があるのだが、日本人は頭をさげる(うなずく)ことで、相手に対して同調姿勢を示している。うなずかれた方も相手が、自分の言っていることを理解してくれたな、と安心する。

イギリス人 CA たちは、授業中、うなずかない代わりに、質問したり自分の意見を述べたりすることによって、自分たちの理解度を教官に知らせていた。

授業でも、ブリーフィングでも、ヨーロッパ人 CA たちは、うなずくことによって従順さを表現することに慣れていなかったし、それが日本人のやり方であることを知らされていなかった。



### 《私たちもアガります》

日本人から見ると、欧米人は背も高いし堂々として見える。論理的にものごとを言うてくるので大人に見える。ある時、モックアップで食事サービスの実技訓練をしていた。ファーストクラスでのサービスを想定した訓練である。いつものように訓練生 2 名を CA 役として指名した。

ところが、よく見ると、オードブルを盛りつけている手が震えている。そして、真っ白な肌に湿疹ができたようにまだらに赤くなっている。顔は緊張でこわばっている。

「アレックス、もっとリラックスしてやっていいんだよ」

「私、いますごく緊張しています」(I'm so nervous.)

辞書をひくと、"Nervous" は「神経質になっている」とか「興奮している」という意味がでてくるが、「緊張してあがっている」ときにも、彼女たちは、この単語をよく使っていた。

日本人は、緊張すると、顔は紅潮するが、腕や首のまわりまで赤くはならない。彼女たちは、肌が白いからかもしれ

ないが、その白い肌の腕や首まで赤くなってしまふ。いつもは威風堂々としている彼女たちだが、やはり若い女性たちなのだ。

— 続く —